

吉跡考

儿甲 3  
2548

号四 五<  
百

赤





凡 3  
第 2548  
卷

特







愛岳麓藏書

武州碑文谷法華寺考 一

同播樹郡仙谷山壽福寺 并辨慶之筆大般若經之事 二

同高麗郡土中家之事 三

同豐嶋郡谷中廣隆山最勝寺總持院來由之事 四

同葛飾郡千葉寺普賢寺由緒之事 五

同荏原郡鈴森磐井社奉納烏石之事 六

同葛飾郡立石村五方山南藏院什物劍石 并立石之事 七

同郡真間國府臺之事 八

佃島碑之事 九

半田稻荷參詣道之記 十



江戸愛宕山仁王門、桃井伴山掛額之事 十二

同所、荒宗掛額之事 十二

同所、佐々木郷右衛門掛額之事 十三

京堀川本國寺什物日蓮上人赦免狀并別當職之事 十四

美濃國不破郡垂井宿鐵之塔之事 十五

肥後國熊本蒙古退治繪卷物之事 十六

奥州松島和泉三郎忠衡燈籠之銘 十七

越前國織田邑祠鐘銘 十八

國伊都岐嶋水精寺鐘銘 十九

摂州丹生山田千年家棟札 二十

南都春日社多賀常長常房奉納燈籠圖 廿一

國壬生寺鐸口銘其外所々古鐸口銘 廿二

甲州山梨郡府中尊體寺縁起 廿三

山城國葛野郡柹尾山高山寺蘓婆堵規河碑 廿四

飛鳥淨御原碑考 廿五

濃州赤坂驛御勝山安樂寺鐘銘 廿六

摂州須磨寺什物辨慶筆寫 廿七

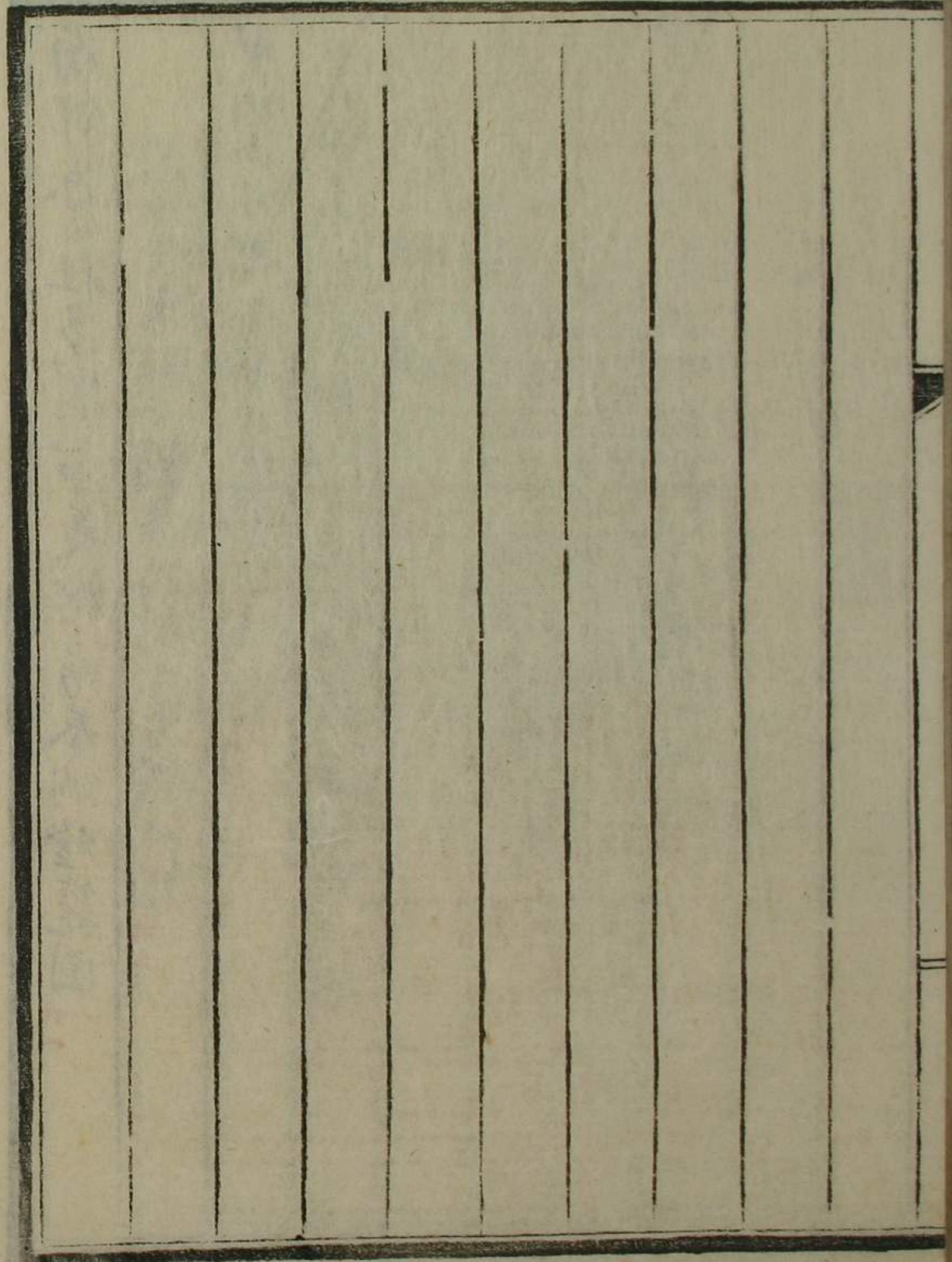
同八部郡長田郷長田大明神宝物記 廿八





碑文谷法華寺考一

武ノ玉河稻毛連歌師梅原時方云碑文谷法華寺ハ昔ハ華嚴宗もく古キ寺なりをしく弘安の頃無任なりしを日蓮弟子日源再興して日蓮宗ニ改宗したり往古の神宮寺あり人本堂釋迦堂仁王門ハ昔より乃造立のまゝなりしを元文中東叡山凌雲院焼失乃時了此本堂を賣り今ハ釋迦堂仁王門の殘るどかゞり侍ら付と考左の如し遠清曰神宮寺ト云ハ誤リ也國分尼寺ナラン事先ニ考置タリ 聖武紀曰天平十九年十一月己





卯詔天下諸國別令造金光明寺法華寺金光明寺  
國分寺而國家鎮護寺也法華寺國分尼寺而法華  
滅罪之寺也云云

今武府中六所大明神前馬場脇寺ヲ國分尼寺  
ノ舊跡ナリト云ルハ何ノイハレナラシ天平

十九年丁亥ハ當天明八年迄千四十二年成

忠玄法師大卒都婆碑文書テ埋ニヨリ碑文谷村ト  
稱云云

忠玄傳並碑文埋ニ所不知年月モ不知

武州荏原郡世田谷領碑文谷村天台宗上野寺  
未

領拾九石 妙光山法華寺

中頃日蓮宗一致不受不施直本寺色衣聖人寺

開山嚴譽院日源聖人始嚴譽律師駿川岩本而

老之第一正和四乙卯改宗日蓮之弟子十八中

年九月十三日寂世二日善世三日行世四日明

世五日誠世六日耀世七日豪世八日胤世九日揚世十日瑞世十一

日進身延上池上論時池上方而世十二日域世十三

日祐寬永七年四月二日佐渡へ流罪世十四日映世十七日因世十八

元祿年有故天台改宗年号月日

天台開山世二 世三張英法印 世四



五世 鑑古大僧都世六典應 七世 誠波權大僧都世八溪須

九世 俊雄世十 安阿彌世十一 佛工系作 光孝天皇六世 定朝天祿五年 法橋 覺助

賴助 康助 康慶 輝慶 湛慶 安阿彌快慶

釋迦堂 飛驒工造 中頃ヨリ細工ノ願ニ而大工七日斷食ニ而此堂二王ヨリ籠是始ナリ

日蓮宗之時之坊舍十五軒

本音院 本照院 本成院 寒理院 行遠院  
安國坊 杉本坊 昌樹坊 岸之坊 藤之坊

上之坊 中之坊 東之坊 西之坊 北之坊  
同末寺

三崎妙林寺 四谷自證寺 谷中感應寺  
雜司谷法明寺 湊草蓮光寺 目黒妙圓寺  
堀内妙法寺 橋場長昌寺 四谷本源寺  
四谷延壽院 三田妙巖寺 千駄谷寂光寺  
三田中道寺 三田多門寺 四谷地福院  
青山教覺院 目黒正覺寺 衾 淨圓寺  
立龍寺

此外數多畧之



鐘

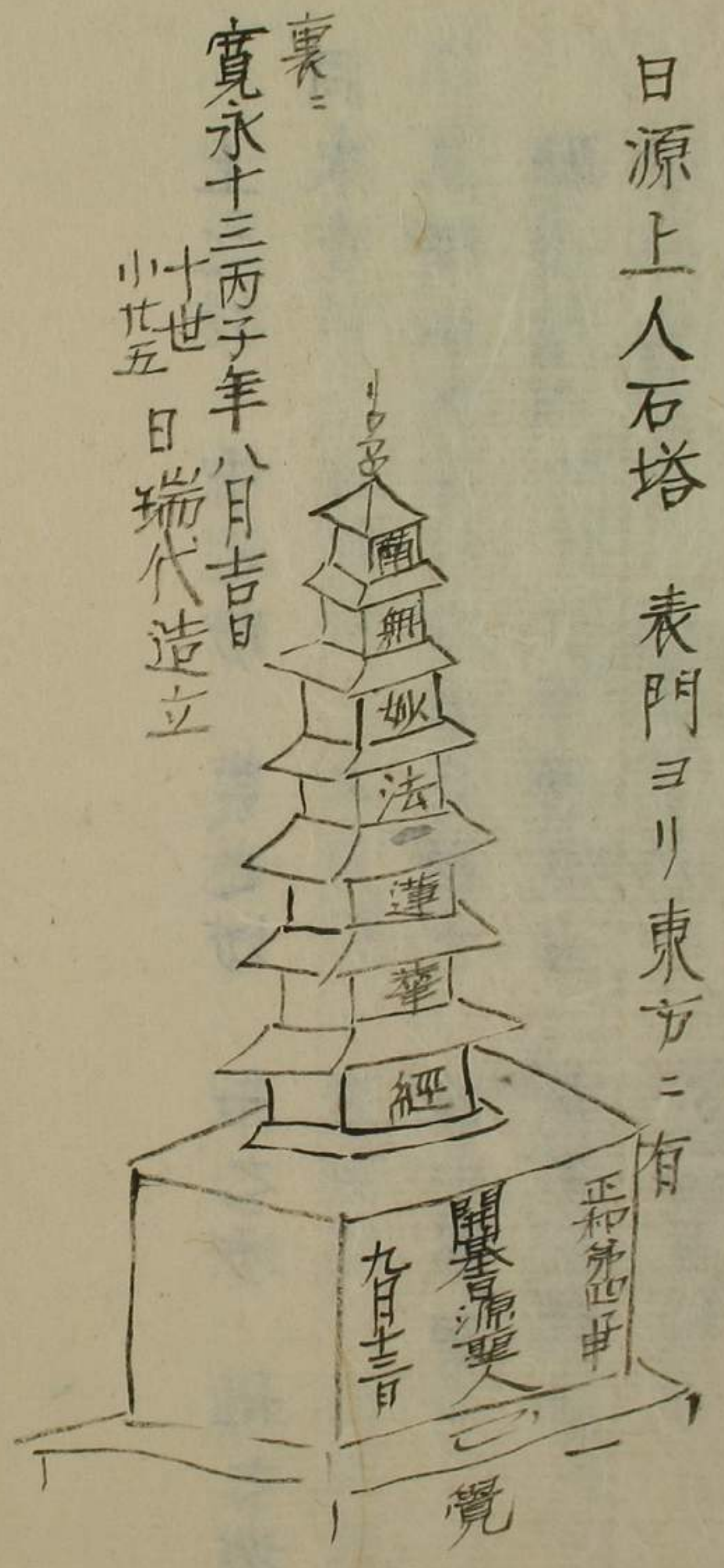
武川荏原郡碑文谷村

妙光山法華寺 當住 寄附主日長

寛永二十癸未歲九月十三日

鑄大工 江城住 飯田喜兵衛家次

日源上人石塔 表門ヨリ東方ニ有



裏  
寛永十三丙子年八月吉日  
十世 日瑞代造立  
小廿五

此處の池のあり  
ちも法華池の  
めまをといふ  
池の端は後を  
らへて法華の  
まゝといふ  
不見地畔とい  
はるるまじり

飛澤工の造るる釋迦堂と云はるるはききて大工  
こも惣かけ二王門ハ龍斷食とて山師といふ  
りして瘡毒を才一こして諸病は願を二王よ  
かけ七日斷食籠ら奉りて此天羽八年夏專  
流りて一也元永年中天台宗も改りて時日蓮  
を堀内妙法寺に買受拾年以ふて山師が  
流り諸堂山門建ちたり今一神の日蓮は若池  
の端乃妙法寺に買受けたるは是れ縁ゆかり  
膏女の瘡り病入膏も此法華も不各人  
はもいづ教てもげり人々の二王の断食



山とち申あつた

安藝守藤原正範去年の冬諺々まゝハ武藏北玉  
河乃向ひなる岡ハ仙谷也いふ所ありむらゝ仙  
人住ける少人所の名を以て村民之傳ふよし其  
所ハ壽福寺と云ふ寺あり昔九郎判官義経奥州下  
向の時此寺よ志をくく止宿ありて武藏坊辨慶と  
始亀井片岡伊勢鈴木駿河等ハ武士々書寫せし  
大般若經抄納め今ハ竹物よて有よし岡及ふ春  
よち申て行く見人申すら進し其物語ハ麻  
布乃天真寺々の仙谷迫而長澤と云ふ不ハ横井  
町長一里計の山屋敷を指右とる少人ハ此寺を



なりはく物語せりといふ人遠清是を聞て考ふ  
て武藏國橋樹郡上稻毛領菅村の内仙谷と云ふ  
仙谷山壽福寺にて禪宗寺領貳拾石の寺あり伊宗  
攝津守支配津伏官領あり遠清知行同郡高み付  
の隣村ありて山續きあり遠清若年の比高石村庄を  
石塚定長話ふ舟慶等の大般若此事ハ耳より止  
石よりこのふい又遊幸を少侍に承見も厚く  
寛也とありて當二月九日ハ例年あるよりの庄を  
在年礼に出りて人々を庄をたよる益をせす時  
よりの高石村に庄を吉澤法長新表を賀して

後中けるハ仙谷村壽福寺に津伏祖御津寺附乃  
撞鐘と半鐘有之半鐘割損し用ひが故  
去秋清直より津名を又彫付し清直より  
津岸より地頭領事より仙谷壽福寺  
中用りし半鐘仍舊撞鐘の事も用ひし萬石  
年中加賀美金子源正吉事附有之銘文ハ賞  
と半鐘も同文の事其彫付し文意  
物の中付侍あり

詳慶筆大般若經の事も少礼し  
遠清知行高石村も先祖用基の寺萬松山潮音寺



是に則壽福寺の末寺なりは潮音寺の撞鐘も彫  
付あり

武之東都江戸郷内有一蘭若乃加賀美金右  
<sup>衛門</sup>金吾源朝臣正吉公者菩薩戒弟子抽丹栴苾  
進之乎竊以願力堅固此事速成就者也鐘之  
功利宜因爲之

今茲 萬治四上章困衰歲仲春吉選日

萬松山潮音寺

鑄工

渡邊銅意源正俊作

此世ありは壽福寺の鐘も同時なりんは加賀美金吾門

正吉も其父才色清正光天正年中高石村津領して末  
江戸番町田邊以末之言石村も高石村に正吉も高石村  
も於て出家せり同系津陳も高石村に供奉あり  
其時供せり子孫の百餘を言傳もありて由緒  
て陳村の仙岩壽福寺にも事附有りとあり  
合長門正吉は大津藩勤後少令奉行也明暦大火の  
時も二番町の屋敷に残り諸大名法旗中を給り合  
りしは節の津用勤なりて子令長門有常は山小姓組  
勤りて子令正延重其子令長門正良其子令長門  
遠貞其子二四市遠清なり



仙谷壽福寺口行程

四谷

内藤宿<sup>新</sup>

追分新町

代田

<sup>上</sup>高井土

烏山

給田

下仙川

金子

國領

<sup>下</sup>布多

下石原

玉川

谷野口

菅村

<sup>仙谷</sup>但谷野口<sup>十四町余</sup>

又

赤坂

青山

上湍谷

<sup>道玄坂</sup>

池尻

三宿

太子堂

世田谷

用賀

岡本

大藏

喜多見

楮方

玉川

登戸

上菅生

菅村

<sup>仙谷</sup>

但登戸<sup>一里半</sup>

武藏國之野原<sup>安</sup>須村<sup>出中埋家</sup>  
同 團入同<sup>小谷田村</sup> 蛇骨<sup>乞</sup>



武藏國高砂原多磨入河之郡の境高砂原に安須村  
と内入河川南川端安須ヶ崖の真間と之原の寺ふ  
埋る松原菅の家捨町中継とあり入河川洪水  
少して川欠ヶ崖と叫ぶるとき右の家顔出るよ  
年次一と事よて誰に名も知らずなし  
長明寺を築ふりて武州入河川の邊に居る  
官有う家ふてもあらんうれは流るるおもむき  
いふも松皮の板を女物りておかしき根  
えらとくらの光ありて石の如く  
安須村の東隣村よ入河郡小谷田村新田と云り



この村の内は押込と云ふ蛇骨穴と云ふありたき  
穴として穴の内石をたきみたる如く高野村  
板馬知り小谷田村はく酒を夜脚と云者乃  
持ありて穴の中は蛇骨ありて有て血止ぬ也  
村氏のいひはくひ小昔いさ小押込及はくは  
よ或村比の産ちふくあり声すくゆよくなせ  
みりふじ地の産よた蛇すんで今まさふ出へと  
ほつさりあり大蛇出なはけささくぬまとく人  
とり小押込よのち牛殺るさ松の角本と地よ打母さ  
これと活り又其頃麻町屋入向の市は押込及

白大夏とかりをけりたるふは押込部より出たる  
市人より持きてとるこれさの古刀なりと白大夏  
袋の破まきつる穴よりこぼき産まはち産一粒二は  
切く押込よの是と云てく古刀は名細ありんと  
買おりてこれ首足丸とつる名細ありたるは押  
の市人持来しと物集しと押込及ゆれたる岩根村の市人の産  
切ふく名細の光りて地の産よはた蛇骨死す  
てそしと細を市人押込よのく持あり押込よの  
この細をつんて是は声とくけす小芝と切られハ  
細の魂をてやしく活えよかりあり是よそハ



名細ありぬら不用なりとて求給りすまゝの  
大蛇の骨ありし所の押込及の子孫少谷田村の  
百姓とて土形あり蛇骨定の持主にけり酒屋も  
押込屋御とけり此と少谷田村百姓八右衛門の給  
ありは虚実不ふ明あり

先年福徳孝化話ふ昔大蛇を殺したりと云ふ  
家傳中に記入と語りはけ蛇骨定を混雜せし  
ありち中の家と蛇骨定を記村と遠く其間も  
余程へたりしやうの程にけり其間も  
前の事とて家の埋りし事ハハハハハハハハハハ

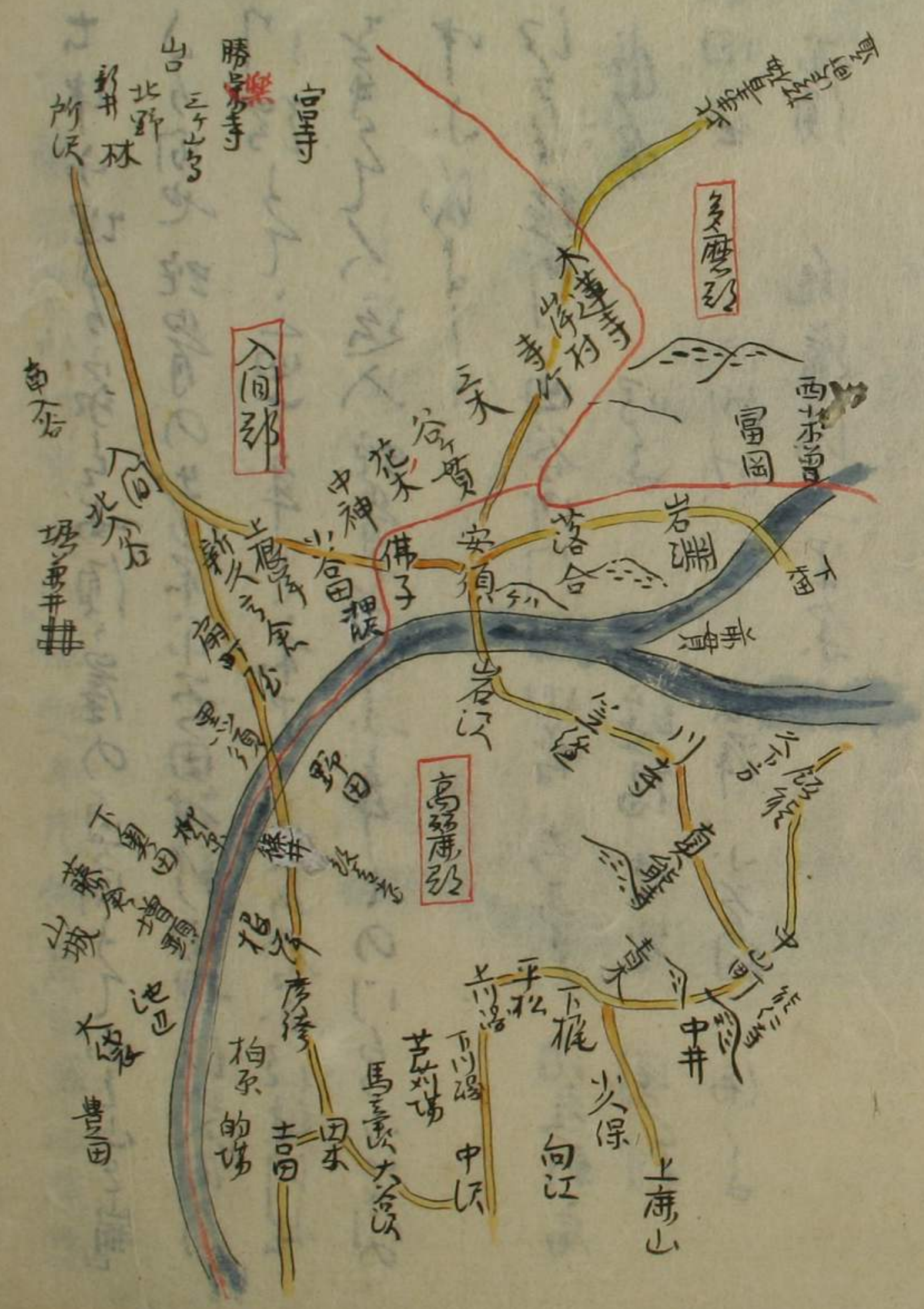
川

蛇骨と茶店と持の事  
よ年若くして其間も成とてとてあはし  
ち中と埋り家の互に入同の川端をけけは  
ありし所あり其の者あはずとけのまこと

一萬師の事ありしころ  
○上の山十作木屋の盗賊住し  
ころ強盗部安原村の田安原とて外ハ其間の知り  
入交

少谷田村の先味杉母孫承政時先祖の  
旧領也先細五味之助助政義天正十八年少谷田  
責の時蒙疵許帰凍以前とて少谷田





北野郡より坂谷より多摩郡郡界より北野  
 其北野と小宮田村に華一今小宮田の墓と  
 新の墓よりあり子孫の味形母に墓と  
 不知して先年開く少ありはれもたれ  
 さりとて遠信より之経藤郡田本村の名を  
 金子御所<sup>右</sup>中井のり一親母の岩の實以之  
 百年一此の年忌は年中楊のすところ云



七中ノ埋方家と女須ノ崖の真向うへ山と山と崩  
 ころ同也蛇骨の出り本小西田村新田押込の入口乃  
 川路より之西十年と云々して穴の入口小江連江地  
 を穿てし人迄入蛇骨を獲ふ年々の川よりありて  
 中ノ小川よ

江戸台橋所 四谷門 四谷 ちあや 内多新宿  
 道方 町子 逆橋中坐 岡村  
 田中 新江 根岸 小谷村 佛子  
 女須 凡道法十里余



之蘭若素所持來之以釋迦牟尼佛爲本尊以座像



高須

凡道法十里余

武州高麗

郡川津村

入間河降ノ

山頂年缺タリ

其所如圖家ノ

軒端出タリ所々ニ

深ク如クナル木石

炭ニナリテ有家

根ハ杉檜ノ皮ヲ

以テセリ行程

四丁ヲ経テ亦

軒出タリ太古

ノ舎空地

亦及シ土中

入タリト見ユ

長間五丁程

高天

一丁ニ川ナリ









不動明王

延像則其長丈六。是良辨僧都之。崇于護

摩堂內。此院者。屬于台嶠東光院之末寺來也。然大

久保侯之先祖相摸守忠隣有故得御勅氣被沒

收其領小田原城。蟄居于江州其室。石川日向守家成之也。

潛居于小田原城下。忠隣之三男右京亮教隆四男

主膳正教方。此二子共此室者其父忠隣與慈眼大

師。南光坊。嘗有懇遇故憐其難事。招彼二子於東叡

山而令二子居于山下之明王院。歎訴不及終被配

教隆者南部教方者津輕後年此二子有官赦出

配所來江府奉仕于幕府。教隆子孫今對馬守家。教

於是教隆携其次男木工頭教博。後名加賀守忠朝也。來于東

叡山。頻并謝舊時之恩遇。此時內心改宗。為天台宗

故并授松慶院之法號。以此例。故忠朝之忠增以來

切發起信心。追善祈念。日夜不怠。因是正保年間當

院之法祖。以有明王院之法緣。故教隆之父相摸守

忠隣常所崇之。十一面觀世音像。其高貳尺八寸。同母儀所

侍之圓鏡。其耳八寸餘。以是寄附于當院。永令祈念於菩

提真福。然寬文十年庚戌四月十九日。如賀守忠職

忠隣之孫而常常之男也。忠職雖有三子。皆早世。於

是七弟右衛門忠世以來。嫡流之血統絕矣。奇哉。病卒而無繼嗣。故木工頭教博不計亦出自庶子家。



而相續本家之統，備是神佛，如護故尋補執政重職。  
三蒙增秩，續八萬三千石，為終拜賜先祖舊領小田  
原城也。於是尚又尋思往事，本家忠世與信康君御  
忌日同年月，而以九月十五日而病歿。其子忠隣，蟄  
居其子忠常。  
短命其子忠職而血統絕，餘殃傳子孫，以歎息恐謹請當山新奉  
贈信康主築山婦君之御法號奉禱。信康君於  
泰源院殿覺築山婦君於了臺院殿妙揭此兩尊  
法一道大德。牌奉安置當院。外牌各入厨子上附葵御紋，而添之。此故奈  
何者七郎右衛門忠世奉神祖之嚴命保護於信康主築山婦君禁銅干

忠世之守城二股之館也。先是婦君之養父今川  
義元為織田信長公被殺矣。然信康主娶於信長  
公女是乃為主，雖為仇家之女，依時勢不得已也。於  
是主之室與主甚以不和。故主築山婦君  
相共聞有可討信長公之密謀，彼室以是內通之父  
信長公，信長聞之大驚，招  
神祖之老臣酒井左衛門尉忠次於安土城，舉其罪  
狀以告之。忠次頻讀責之，忠次無為奈何之直歸來  
告。神祖令其臣服部半藏天方主馬遣二股城



請出倡於信康主時城主忠世出于濱松城不居  
自城忠世之妻近藤木工右衛門之妻自携長刀出  
迎此兩使於城門謂之曰余夫忠世出于濱松而留  
守也無可出倡於信康主之一書謂之不能令出  
倡也然間彼妻相計令忠世從士十三人圍繞守護  
於信康主浮船於天龍川主衆之雖欲令遁于  
駿河今川家兩使須臾一書持來故不及是非彼主  
從相共自其下流揚陸地而主忽生害矣于時天  
正七年己卯九月十五日也自天正七年也於是送葬于  
尊骸於城下清瀧寺也先是築山婦君同年八月廿

九日

神祖之臣野中三五節重政奉

神祖之嚴命令築山婦君生害于濱松近境小

藪村之地以其害刀洗水之池重政歸來告

神祖神祖易色憤然曰何剃髮為尼不追放而殺

害哉重政聞之不堪恐懼之至自是而後引身墊居

堀江之地重政子孫奉仕幕府祿僅拜賜年俸貳百

然加賀守忠職拜領唐津城之時或年四月十九日

現夢怪異之事故欲修追善薦冥福自是而後每年

正五九月自捧供物令僧讀經城第番衛者皆々設



食膳而施與之且命從士木村免角者上五自唐津經大坂免角先到忠職之大坂中島代即宅調此資用杏奠銀子參于遠州清瀧寺同西來院代忠職捧香奠而敬拜彼尊牌奉報追善供養之萬乙矣此以後忠職之男忠朝忠朝之男忠增爲例如此每年正五九月設爲日待之事於今有告朔然後元祿十五年壬午十二月三日忠朝自書願書二通寄附摩利支天并如意輪觀音之兩像於當院每年正五九月自十六日迄廿二日一七日之間祈禱執行廿二日忠相同其男隱岐守忠增可并授之御札守附與忠朝代恭之者且忠增昇進四

品時亦忠朝自書願書寄當院此願書今傳云當院當院古來如此神佛寄附正五九月祈禱執行其外有事故之時殊兩尊牌百五十回御忌辰有寄附金銀米苞當院之事然自當院始祖至現現任侶讀經追善祈禱勤行日々無怠誠是陰德陽報積善餘慶天理當然可恐可謹者也云爾



名忍口上書之奉願作

一武勳葛飾之郡西葛西領之内上千葉村京

言宗普賢寺由跡仁王九十年代

一後宇多院御宇弘安六年癸未曆法空法印

一因基當元祿八年迄日百拾六年在取作古

跡之住寺勤朱<sub>リ</sub>中<sub>ハ</sub>則山号日正山源光院与

号中<sub>ハ</sub>

一弘法大師鏡之御影一幅什寶法在<sub>ハ</sub>

一聖德太子像一尊御安置雲慶作

一地藏菩薩像一尊御安置春日寺作

一藥師如來之像一尊御安置同作

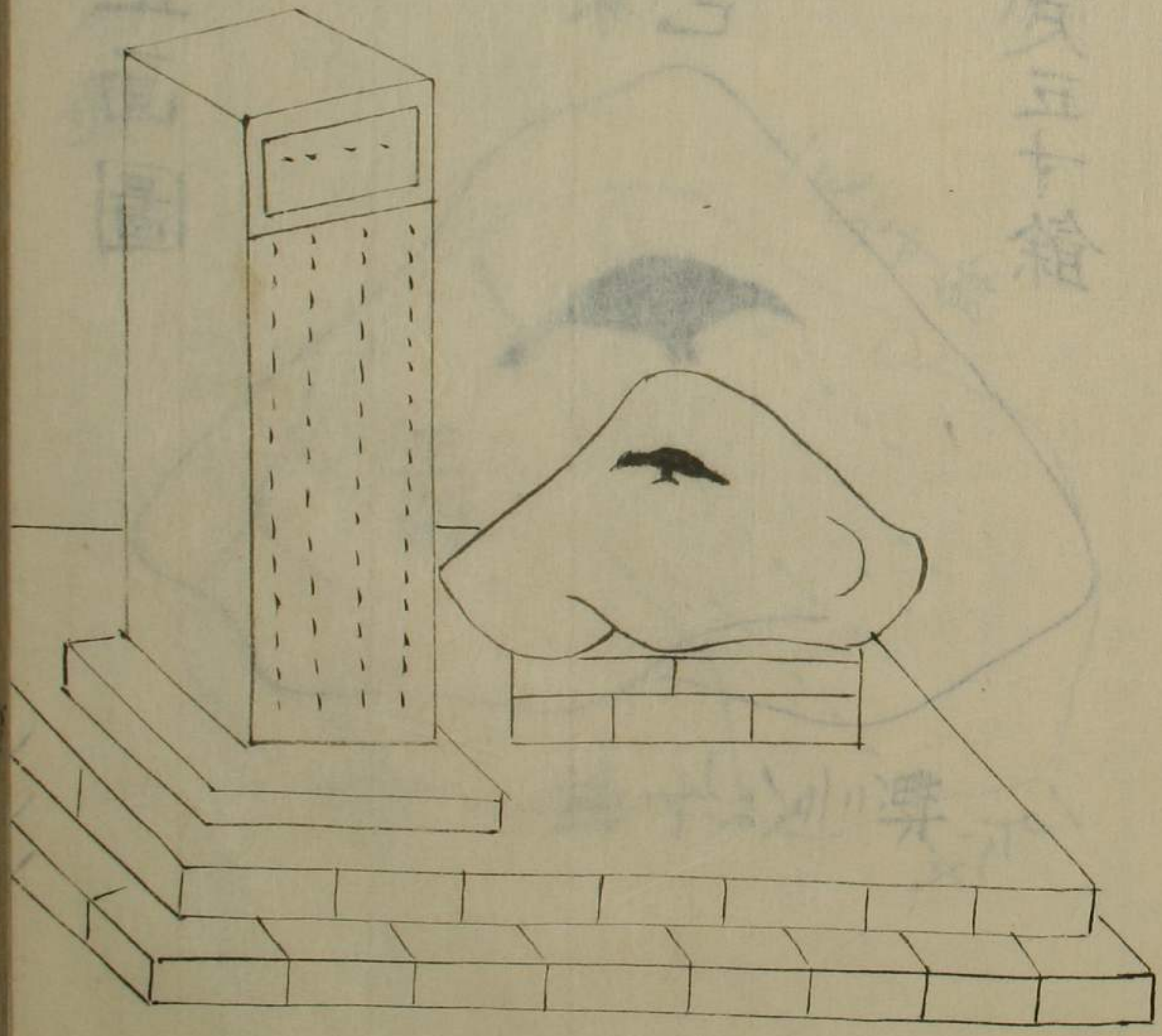
一葛西之六郎重氏之石塔一體并<sub>ハ</sub>一屬之石







烏石圖



真言宗普賢寺開基事  
 一本寺武初吉戸村宝持院末寺  
 一弘安六癸未年法空草創之寺也貞享二乙丑  
 年迄日百三年也  
 一壹反拾步寺中繩除

日正山  
 新義  
 源光院  
 普賢寺

*[Faint vertical text bleed-through from the reverse side of the page]*



烏石正面圖

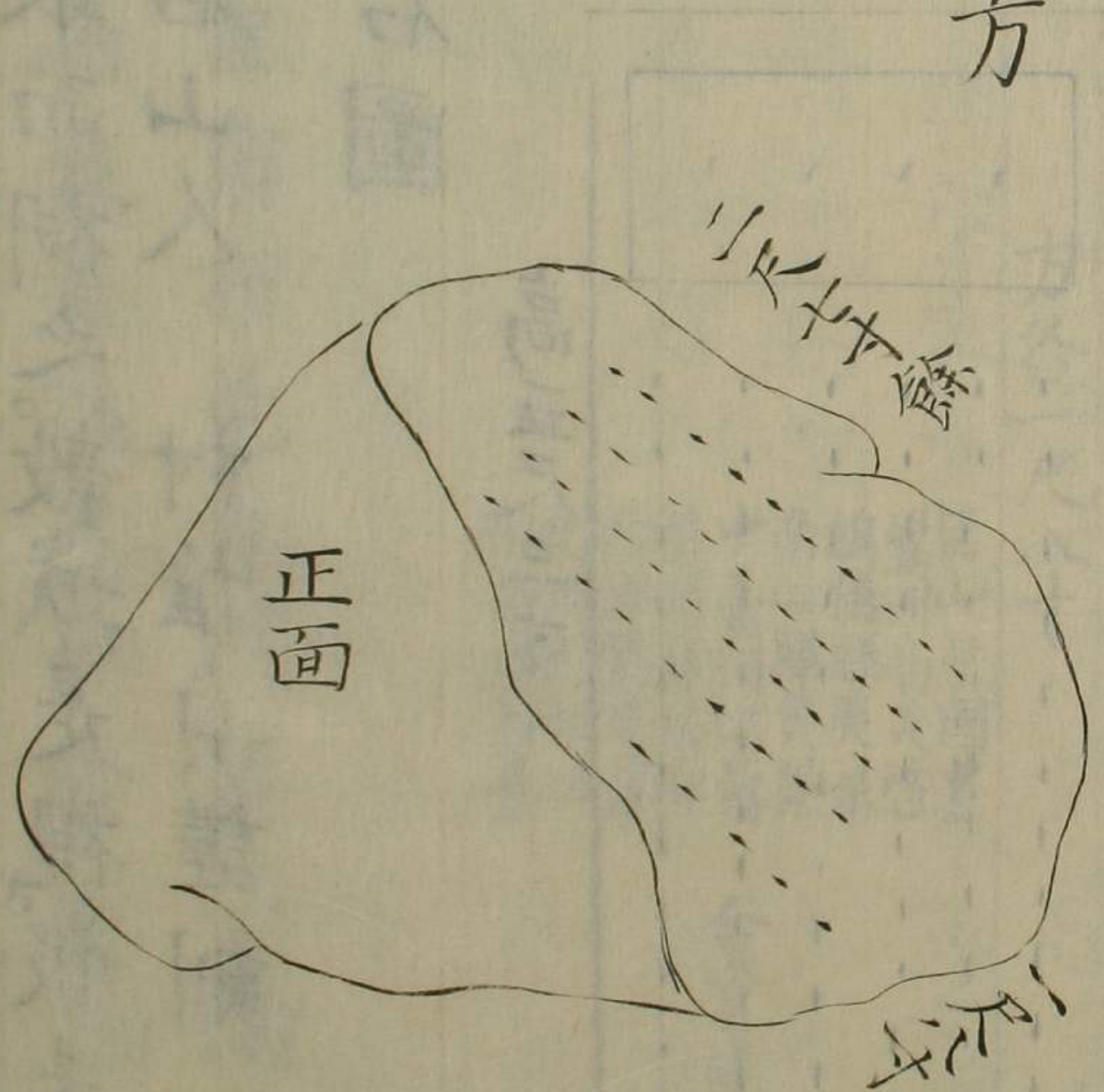
烏象  
黑色



高二尺五寸餘

橫三尺九寸餘

左方



正面

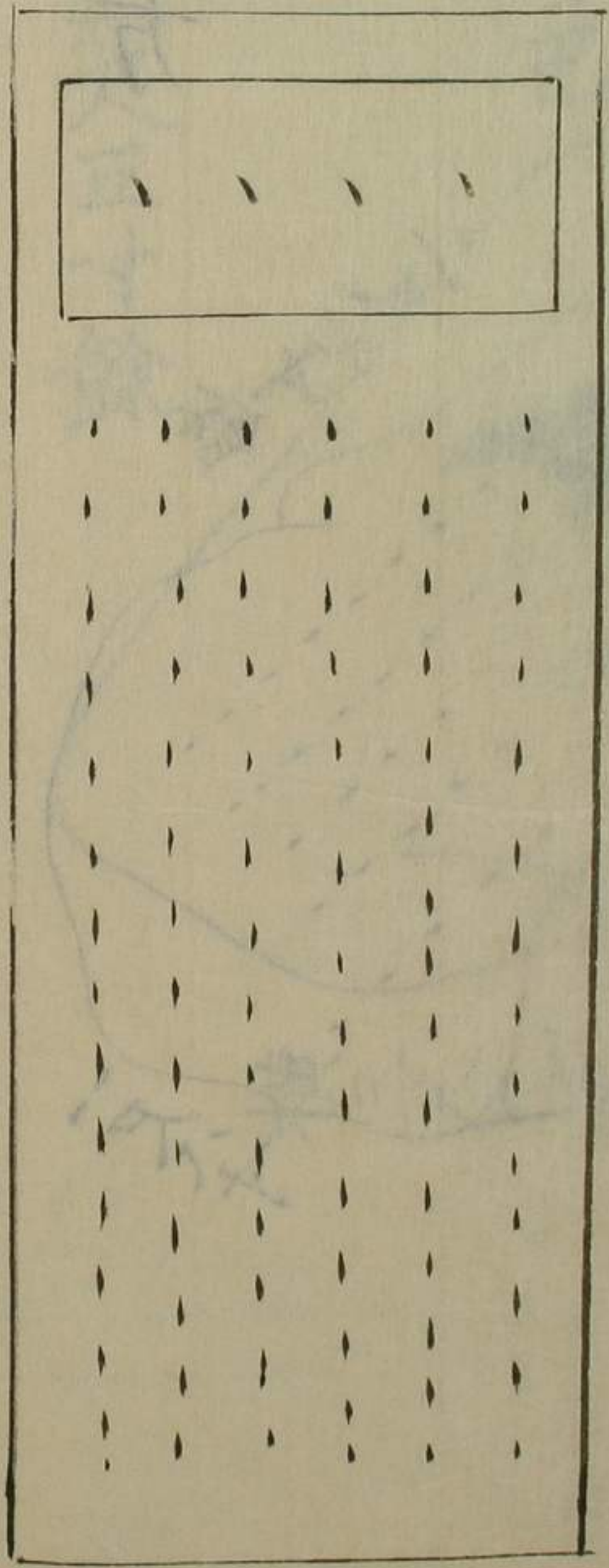
烏石銘



匪日匪星。烏石天墜。不黃維烏。書傑  
 取致。取而祠之。穀城是視。服元喬銘  
 為烏石山人。村惟貞謹刻

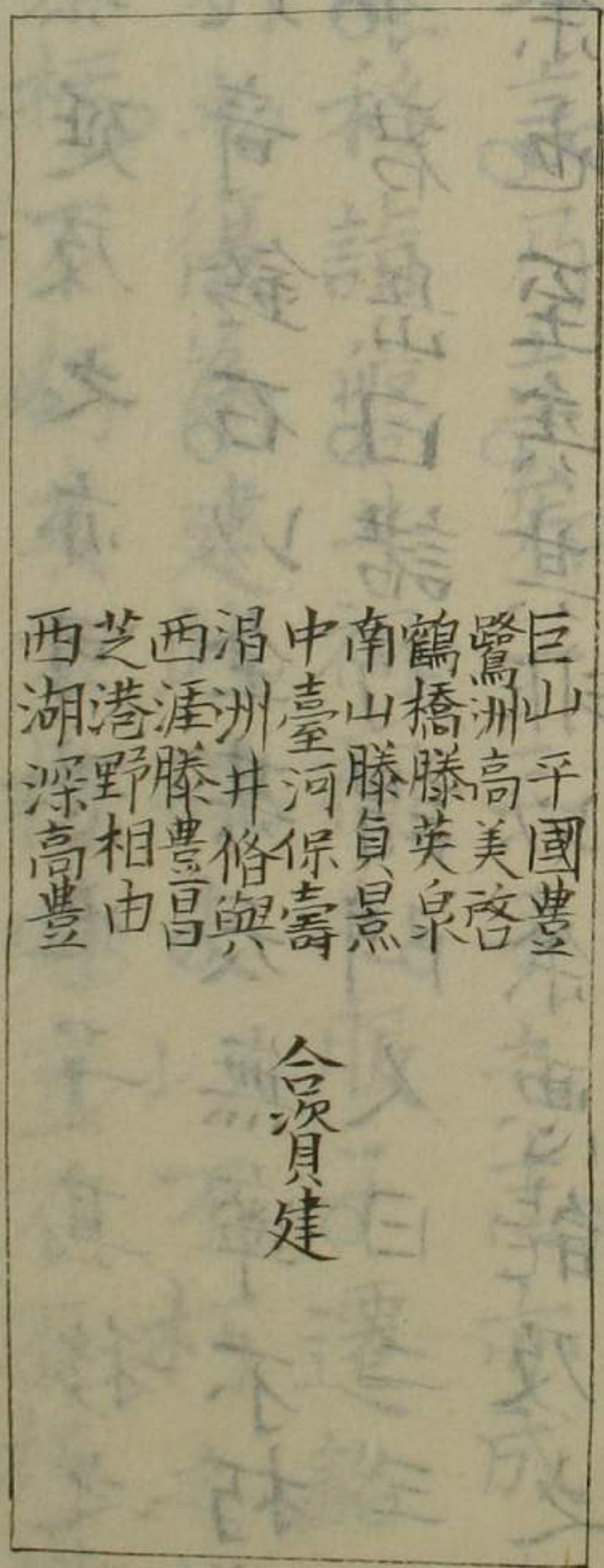
碑石圖

高五尺三寸



碑面

方各一尺八寸



巨山平國豐  
 鷺洲高美啓  
 鶴橋滕英泉  
 南山滕貞景  
 中臺河保壽  
 涪州井怡與  
 西涇滕豐昌  
 芝港野相由  
 西湖深高豐

合源貞建

烏石本在麻布邑古川第二橋傍。腹有  
 黑而成烏象者。隱然如於爰止。人因曰  
 烏石源。君岳居古川。因自號焉。後家于



赤羽其門人今春致之君岳宅以配其人云君岳友人屋代友昌者聞之即詣君岳語之曰豈烏石之竒天竒之邪乃不不朽之哉閭閻之間比屋密邇或火之逸也其延及之亦可恐也子其移之磐井祠比竒鈴石以全其天無寧不朽其不朽乎君岳曰諾乃謂門人曰二三子之愛余也至矣其非以余惡能及之二三子以此怵余亦唯因其好尚也友昌

之言其不聞乎寘之不朽得全其天則友昌之言乃立矣二三子之志亦成矣門人遂移詣磐井祠祠之服子遷銘乃記而刻之復為建此碑夫以不朽之物寘之不朽不朽者豈不不朽哉柳以君岳不朽此石邪將以此石不朽君岳邪石亦得不朽哉石亦得不朽哉崑石生禹烏石生君岳亦不可乎元文六年辛酉春三月豐白杵人莊允益撰















戌卯月十日 多木治賢 飯田町 三橋成想 飯田町

か賀兵遠流將同遠苦四人卯申別出定乙申別前ふ

間あまゝ 西海かゝ晴ち女 七海と尋とる 名歌下也

海約く 母の涙を 海に流し 魚を食ふ

西海か別とる

西海か別とる 八橋中山と別とる

まゝ八橋中山と別とる 神の浦とる

とるを 八橋中山と別とる

一五 新古今

新古今

新古今 昔所や昔は 昔は昔は 昔は昔は

とるを 八橋

とるを 八橋 昔は昔は 昔は昔は

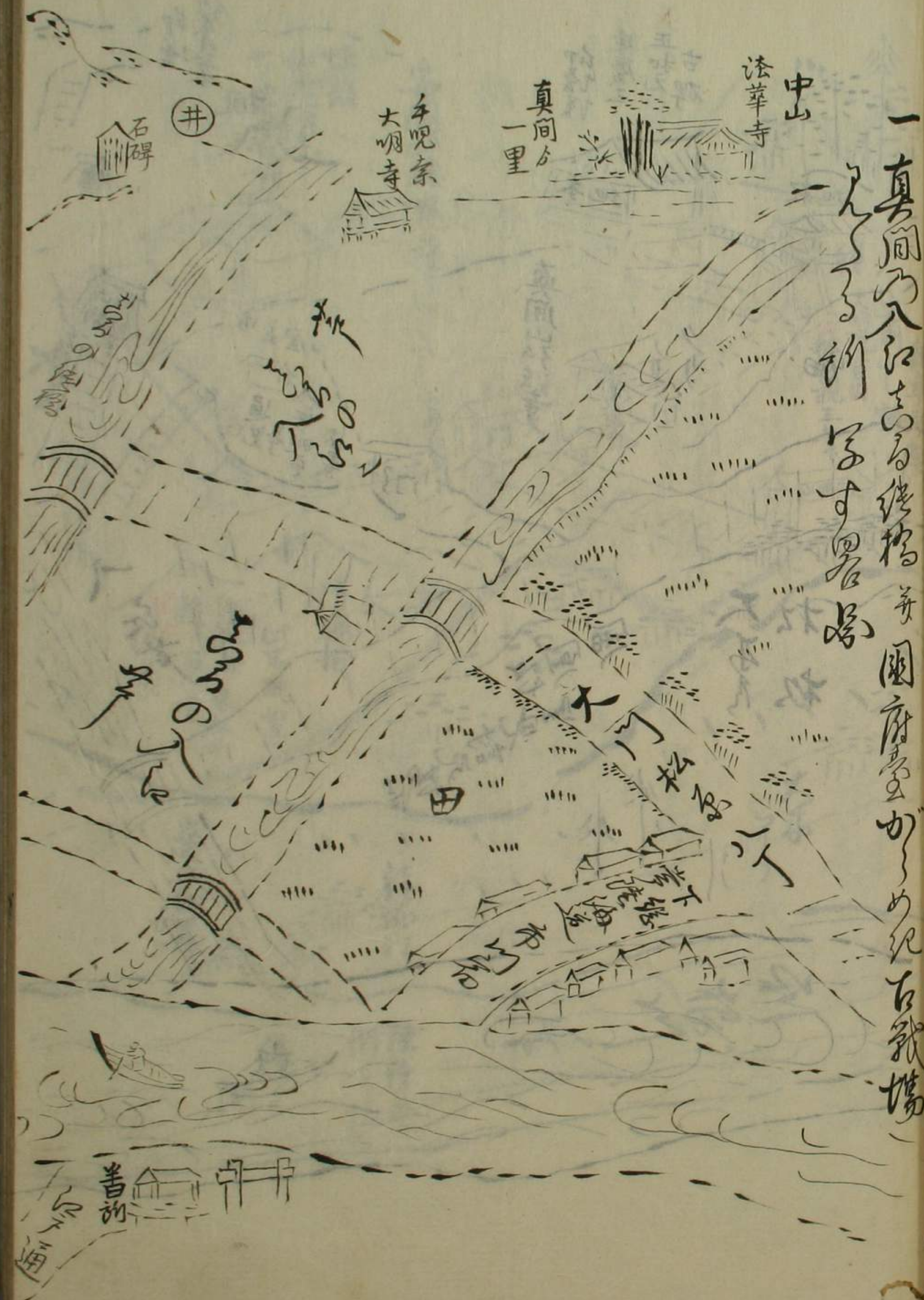
とるを 八橋

とるを 八橋 昔は昔は 昔は昔は

とるを 八橋

とるを 八橋 昔は昔は 昔は昔は





一真間入江に在る徳橋并國府臺かゝり紀古殿場  
 見えし所字す畧也

この中 古歌好多あり畧之

真間の井 法華院の  
 跡 楓 中臺あり

右に在る弘法寺 日蓮宗境内あり

國府臺古殿之跡 日かめ記念戦討死之跡

後ノ淵 滝の臺

右に國府臺徳寧寺 曹洞宗境内あり







石横

昔一城山崩ス  
内リ夜納  
金一可金  
於一可金  
程報者  
山中  
不極頭  
不極頭

櫓の如

星見安房義弘  
出城取正末  
在為時



石横

かた

千尋の如

かた  
かた

かた

かた

石園府墓の如合我

北条氏康  
星見義弘  
方討死之姓名大撰

永禄七年甲子正月七日夜園府墓合我寄子

北條氏康先陣敷北討死之面

遠山丹波守直景

同長集人正

富永之齋屋泰行

山角四郎左衛門

右田越前守

中條出好守

河村修理亮

柴田早隆

翌八日かた合我星見方討死之面

星見民部少輔

同 兵衛尉



西澤淳正為我時

山角修禱寺村前之

正木乃近更時息

同平六同平七

菅野其文節

勝山豊前寺

村元將監

加古右馬允

長南七布

作貫信智守

多指信清寺

同長惡口坊門

多指敏後寺

以下二十人

○國府臺

治臺

日武志東夷征伐時治臺於教園子號云  
又北堂方治臺於院の邊形を初と信の諸の修之  
又下徳國府の右村徳寧寺に國分寺、地蔵寺

一 下徳國首飾那國府臺

曹洞宗門國分寺  
徳寧寺古寺

安國山徳寧寺

古門之平抄之九二枚

一枚北條家一枚清尚家之

校

一 動之清寺月門前竹本修初之平代寺

一 古中一之修之内平之修再中

一 動之松籍寺之修後先改平之校之

右邊北之山寺之修不及用松之水

了處處科之修之修

天正三年八月廿日

清康平下



柿野刻

一軍勢甲乙人等孔物指籍

一敵火の中

一對比中人百姓此方之敵中

石條々等令停止此若物遠紀

忽了敵處散科

天正六年正月廿日

御筆下

一因所市川真間 日蓮宗 真間山弘法寺意門石版

此下ある橋板 二万坪の傍にある碑銘

總橋

總絶興廢維文維橋

詞林千歳万葉不凋

鈴長頼立碑勒銘

同境内東方本兒奈大明神、前塔中銘末院、

裏山の麓、さう河乃井と云河、右井の傍、真の碑銘

真間井

瓶甕可汲同志何傾

嗚呼節婦與水列清

鈴長頼立碑勒銘



鈴木院ノ開基ハ清和天皇裔開田氏改鈴木近江源長次末  
鈴木靜軒源長常也長常元祿九年五月廿一日歿法名  
鈴木院靜軒日丈卜号山上墓アリ長常子鈴木修理  
長頼 真間繼橋及真間井之碑ヲ立

一志前山弘法寺墓所之内考板石古名塔題目拓

書名四枚アリ之月年号母字ハ

一枚 延慶三年九月 考 院院法字守部將軍時代  
院院北條自時 南成寺上之塔

一枚 正和元年 考 同時代 尚成延享六年

一 下徳園葛飾郡市川郡真間

日蓮宗

真間山弘法寺

鐘

寛永十歳戊寅年春如念日

鑄火二

長谷川誠隆書古家



一武列葛飾郡布新<sup>淨土宗</sup>為目自性院竹之無寺之鏡  
 閑山權大僧初<sup>市村氏</sup>豐之者法平其拓之祖安住誠河大和尙  
 十三世亮道代

明和四年歲次丁亥十月十五日

佃嶋以一婦之

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '正和元年' and '考同時代']*



佃嶋碑

皇天を祀りて横濱を治る  
元禄年中古坂を修築し  
功を人に志らんとて  
此嶋に建

攝津國信太神也事あることか  
此神切皇庄三韓を征た

時、庶官中宮常陸守同男三神の御告ありて  
此嶋に建

江戸の都傳文、小笠原、用假谷文、用、都字、ツノ假名、  
たふ事世のゆゑに志れり  
此嶋に建

その名の例は天の  
神徳の合賜ありて津の國佃嶋

漁よとて移させたまへり  
佃嶋なる島波村の境す

とち近き人の神を建たせり  
此嶋に建

元禄七年、川上正吉  
俗稱大坂屋  
中より者ゆゑに船のみたり

かこ地をなすも、子そひおとひ  
度なりて其るや、

よれり、ゆゑに、  
此嶋に建

兼世に、  
此嶋に建

正保、  
此嶋に建

此嶋に建

此嶋に建

万葉集、  
御前祭の祝詞、  
正保、元禄より五十年前、  
前文のいふ、  
此嶋に建



十位と分る八正吉の功と云へりも浦の御神札の行ふるに正吉の功と云へりて上りしゆりてはさうやういふるはさうやう

霊験いちぢきく此の如くおほやうなりたておほきを浦の  
の掟の御れと栞び百舟のゆふ記案らきくよりの時たお

こゝら思をよたたく正吉の功ならぬやかまをこゝらのいささしを

海を舟のうら水くいそ十位の人と云ふやうかえは舟舟

かろを舟舟ともてしとす建とらんをいさへし

きたててやう建の文を三むを故はは神を好弘記

よりのいささしを三とす建とらんをいさへし

寛政三年六月廿日 従後上州文権守筑前縣主李鷹

い文首尾貫通  
ヤ長始よひ  
位吉中は  
朱のまは  
且近文より俗文の俗文の後

古の石のよつとて書ふる一せちよふ人らつては形ひよく書ふるや年の

号の遠るふ人のいふゆゑはやれを筆やうはりて文ははるといふ

へくもりり或人極古此なる事やまはる作て見たりといふまゝ古文近

古の石のよつとて書ふる一せちよふ人らつては形ひよく書ふるや年の

号の遠るふ人のいふゆゑはやれを筆やうはりて文ははるといふ

へくもりり或人極古此なる事やまはる作て見たりといふまゝ古文近

ごといそや帰らせりし津守連の遠流祖神とていふらせり

早

崇神紀ヨル

要字

ユキキ

上(地行)















横田五段の園敷とくらあつら出まを  
日本橋新所を詰ま志うくし  
地しあむせん園をかーあさるゆ  
なまよかをこ

り船やちあひと茶をいあ川の  
敷と津しそれ市人  
天野氏  
正偏

船をくへ行しむか  
小田系  
所停藤あ

小坂が丁あさ町坂ちういづり

しよふし河都とらん自の志らうを

さつし海をいあくにやを侍まを

ね糖ひしりやちい支園とらうと

才一のし武と者し総と元と次

まなまさいつをや二十ゆあん橋と

のちあしし限かー西とあひり







ゆきくわいせうこせふいせふ  
つるまの目

ちよき仰古勝の戸古勝のうらな古勝のうらな古勝

志よあう法宗さん山む之急縁んち急四せう白の院

か江都と火さい災いか江ひ都成火時災せう七の院

人十ぢ百ます余まん余よ余美余が余う余ら余は余ち余う余の余せ余

あ倉を倉あ倉ひ倉の倉う倉ら倉ん倉の倉あ倉ひ倉

と倉あ倉ひ倉ま倉あ倉ひ倉い倉と倉ら倉し倉と倉あ倉ひ倉ま倉あ倉ひ倉

と止あ止ひ止ま止あ止ひ止い止ま止と止あ止ひ止ま止あ止ひ止

ら止ひ止ま止あ止ひ止い止ま止と止あ止ひ止ま止あ止ひ止

せん千の千あ千ひ千い千ら千ん千ち千あ千ひ千の千あ千ひ千

と伯あ伯ひ伯ま伯あ伯ひ伯い伯ら伯ん伯ち伯あ伯ひ伯の伯あ伯ひ伯

乃約こ約ら約い約ら約ま約の約代約よ約ら約あ約ら約ま約と約あ約

す今今今と今こ今ら今い今ら今ま今の今代今よ今ら今あ今ら今ま今と今あ今











ふとせしるち山はせささいをくく  
氣は夕越くけり人といふよ

まのちの山は海にこの氣  
と涙しきんと思ひこりて

茂隆

さしとめく暫し涙り人志乳山

角田川系よ急ぐお海に

天野氏  
正編

むうし誰かりの唐を給びおきく

今よ名半く海派を海しん全

風系がぎりりかー山さんよしまどし

りりりり塔おせさき見ぞ吉系今よ通ふ

くのふありけが海をりやまみつ羽

志世やいことぬく

ちよまおや名よあふカモメ酒月堂  
亭泉

はまきく今戸かき町山の者シテ



場世屋人瓦と屋くちよ志くをけりし  
 の水茶こころその物りも流る地を  
 かくしと川をうふ一箇中よななが  
 都鳥むしきいしく波またも物連砂り  
 あとほくぬ玉橋よりいりし  
 志ひせう二十よ丁よりこほくをな  
 渡りあふくさふ子と志ひをいり

角田川へ近づく

舟中作

兩所開花墨水  
 淡舟杯酒夕陽裏

西次紀  
 年年春色不勝情  
 所所江流笑語聲



川のやと里り  
 ぞりかへ梅丸  
 ながんと志きそや



しりたりへ折く小川へ入るあやせ川と

興月堂  
玉山

なまが 柳を

小あやせ

せ川  
流



ふか子とふくくくくま折の流  
比しに流るのなまが人志志自  
あれとちあう流るまらと川  
か一人こりけらるんか物  
了流まらう子法あむしと  
なまがしとねをけらんと  
あまの系流乃あしと志







んぬたよこちれ如来堂ありぢぜん  
梅丸の物ん不ぬせう  
のあまうそずうそあゆまうこと  
頼るれこちやうとてさきいぶ川盡  
室とちぐゆむ法所はかくて梅丸  
甚きうちたりとしんたあまのよ人  
まれよはけりいりまきいり

わうこちうかきいんご中約のいり  
我思ふ人きありやたやの昔を  
志すひまふ之近世志まふ人  
やど法所よこち志ひさうあり  
ぬせん筆のそひりお給ふん  
くこなり書けく海

良尚法親王



夏天波静 角田川

棹子揚聲 遠盡私

當昔業平 遠是地

風流于威 至今傳

この夏はあまふとて  
近侍 教信基公

山平とせも我ういそくう 柳鳥

ねあつりしよこころをいそ

又うらむしき

ふらふらん梅よむらぶの國乃江家

水とむぐりの角田川がけり

せんさいえんちのむら  
権大納言 為世女

板井由川 誦せん筆  
あはれとむね月乃すく田川

秋の友とんがひとがけり

どうくわんちうあんま  
道寛法親王

都鳥何とんをんを仰と

うらむらむのりめらふとてあはれ







はくたはるながりありあふ角田川  
了りあふららあふはくぬうあひ  
とあふりのごころ

角田川

田興敬

天涯一望海風微  
春色蕭梅子塚

墨水比流去不歸  
只今唯有楊花飛

角田川泳ふりそ柿とり

ふるもえとのこの家おとが

池新り短天と南ふとの水くはゆ

池柳なるとやらり隅田川

あちと志あんまいり村よあむ  
くけ新もあせうのうゆりしと乃











人夜りいふは急きぢやうや  
水乃あかん流なり是より小  
流てなまそ堀川ニほり道り  
やう堀一葉乃海人あうりま  
のせ川の初せうくはありさ  
の初き、私と大川く小せうは  
えあかしてあしたちハ初りく  
あ

田原

甚かきうりをあはに汝川す一廿四

よ町飛り村よく台よ折

大産むいしはみ及たうぬや

さんと海うりて雲のそ履な

うはんとあまの間の間よあ

てり  
遠樹

ふ



ふよとそや

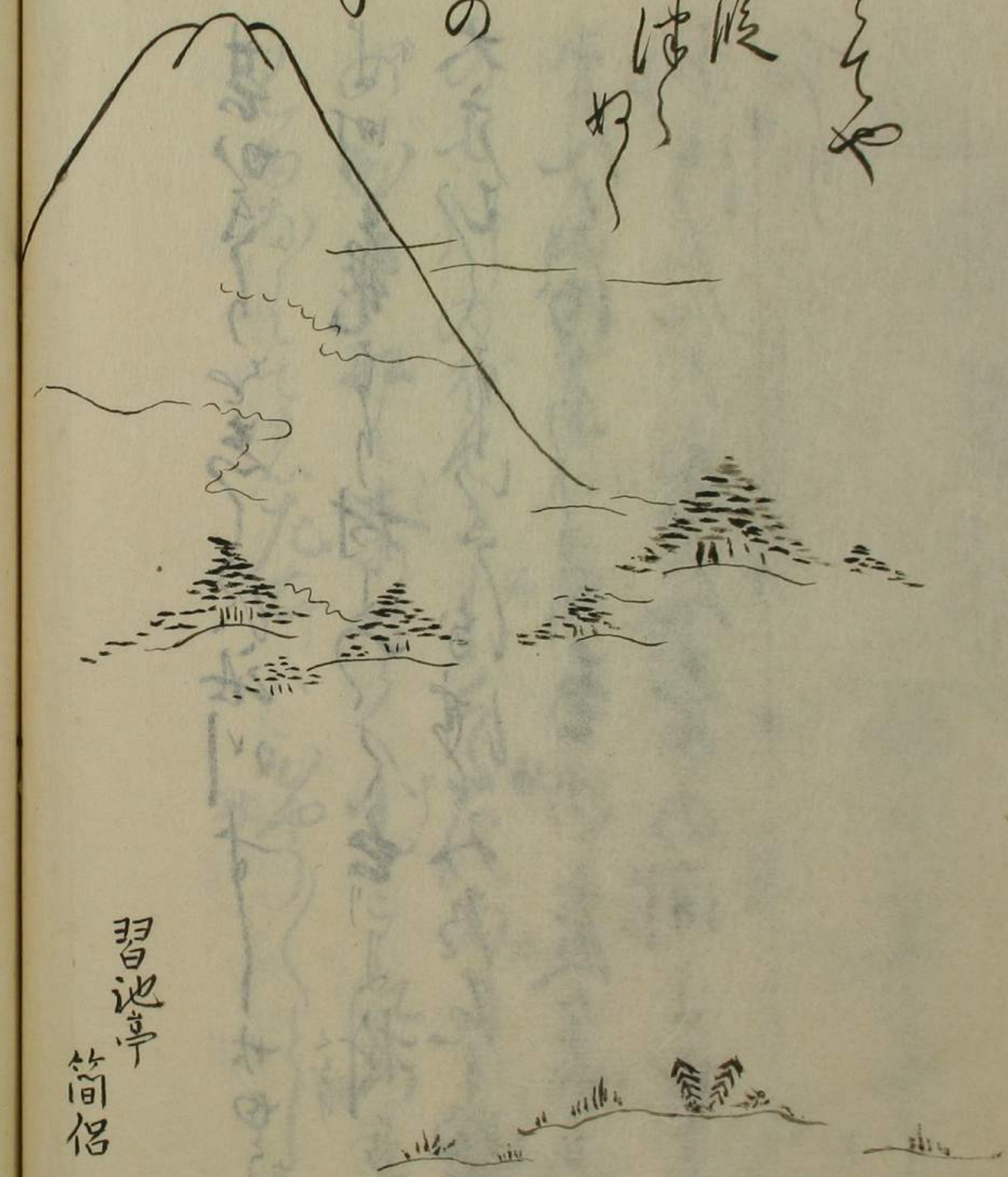
五段

は

好

不二の

冬



習池亭  
簡侶

路傍見富士

驛樹陰陰花正飛

芙蓉峯上遙相見

田興敬

子規啼送故人稀

千里春雲對落暉

右りはくはさんくの産中山

なやうけきりきり川

乃森尼由何是之風系目と極む野

志心よりハ産とけり

山雀

山



あざ清きいばのがさぬくよきまふ  
雄子

草よむらぶ雑子らるる見也解むき甚合 岩信

辻ゆくやと一里中ありて大産村あり

いふはなは梅哲子志海人ありけり

とたらふといふはらふが事なること並

かきべりりくともまらまびりあど信

十日の果をいふ

のちりりくはなは 初猷 小海子 うちひま

二猷 羊のり 大豆の粉 三猷 やまひのり 南田川とあり

とが 故猷 けりんとしむ

大産村なるを海をいふは清き也なり  
あざ清きの一声きくも色ハそれ  
あはぬまふことなりなれども  
あはぬまふことなりなれども  
あはぬまふことなりなれども  
あはぬまふことなりなれども  
あはぬまふことなりなれども  
あはぬまふことなりなれども  
あはぬまふことなりなれども  
あはぬまふことなりなれども



海事ありむうー何世の津宇  
 ありらん三月六日浦士の梅の  
 梢よりやとまきのな紀と海と  
 いふ事あり定家のさうせん  
 了海をらんせしき海公六日  
 てん志やのちやまうりなうらん  
 八日相まうりしとさうらん  
 事海事あり乃しとらん  
 らん海事あり近あれとらん  
 了海をらんせしき海公六日

手松やの事あり郭子

習池亭 筒侶

廿日九早やうみり相よらん

廿日とと後よらん海事

梅啓

廿日とと後よらん海事  
 ち〜〜中回へありむ〜川づらある  
 と海〜あり〜村よ〜海河川中川  
 乃〜〜あり〜らんせん〜  
 のあり〜入るたの言ゆ〜ありらん  
 かん〜道あり〜川に海君



のいりーごぢぢー<sup>五</sup>のながやぢり  
思ひ出ー海まじ川中よあや志小  
あまりり浮志魚といふと成ぢぢぢり  
ぢぢぢぢー<sup>16</sup>何連源氏りーたより  
寺海まを海べー

橋せんのふー<sup>ん</sup>ぬ色よのりーと

このはみぢぢ東まーぢぢ

折かー思ひ出ー海おひ彩宮水戸のあま  
海うのあぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
あぢぢー茶店ちやてんりーやぢぢひ酒杯さけづきぢぢ  
あぢぢよあぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
たぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
小我ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
あぢぢー<sup>類</sup>いりてサまぢぢんきん

林











何ごとのあかしをくみしる部は

かごけなはよ洞あらしり

と縁しを事さしとおぼあわひ

てうあうせうとんまをむりとのこうぢん

聖しと志をひらきんといの

かきしはらうしとちより書

あらいしとんあちやうしとあま

くくの目あなをわ

ぢんぢよしあかんよれあ

ぢんぢよしあかんよれあ

ぢんぢよしあかんよれあ

ぢんぢよしあかんよれあ

社 檀 寺 進

品

品



かきまきしと

乗しや

船り

ふのむねを

之川の

地

天竺  
正徳



牛り  
元々  
寺

思ひ

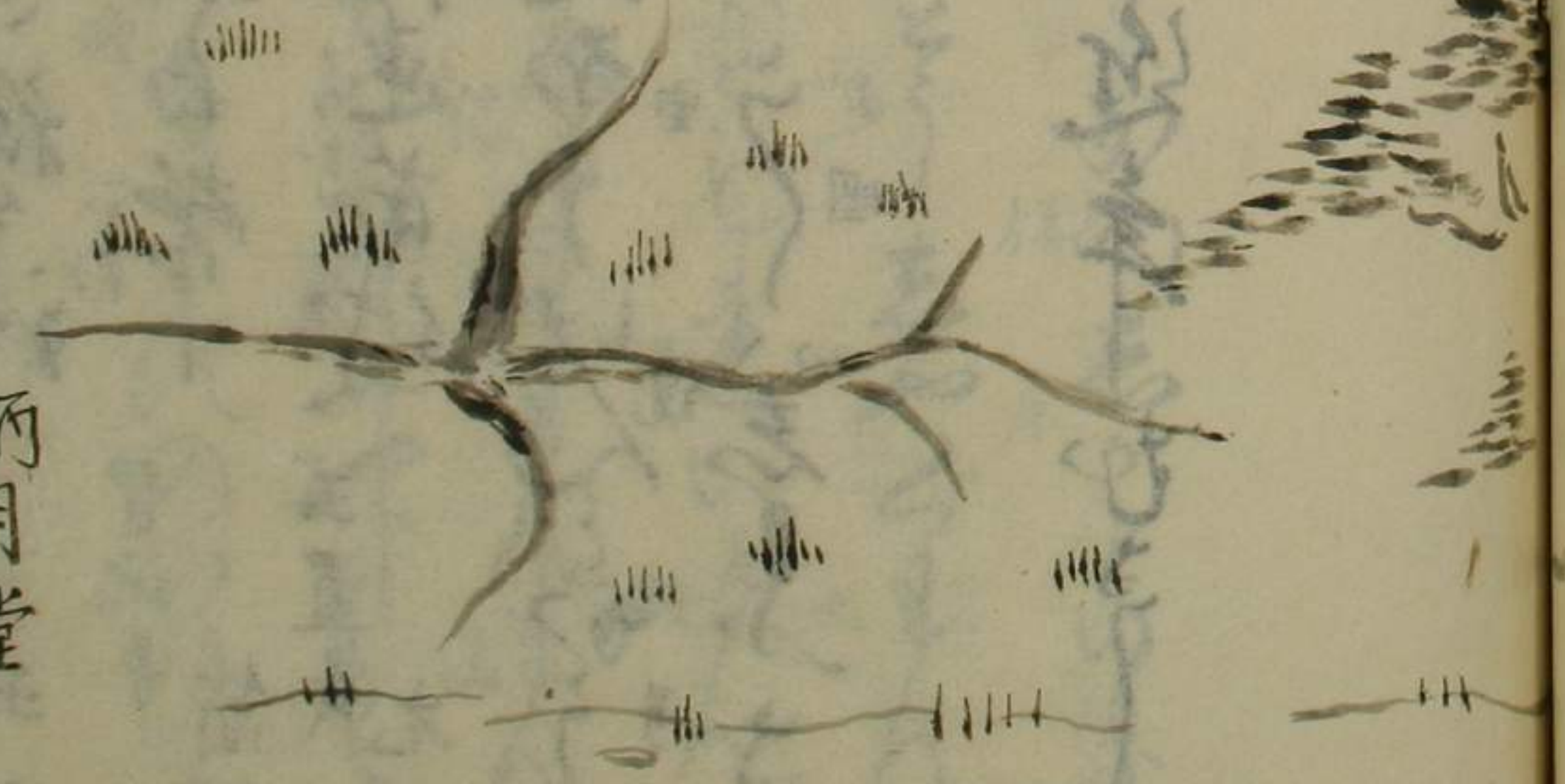
牛な

梳

ん田

れ

丙月堂  
亭泉





雲の宮のしづりぞよき祿が流 毎月堂 玉山

華の盛るん田の東也白帯 習池亭 筒侶

二夜ぞま井乃由延連苗代 玉置氏 元固

庭のとりハたいあうらんやうりんとやう 院号

次志やそうのいしくさううくハ志あさ 別當 宗三 宝院 号

の國をりーが 社僧 尚 國

大君涉りやうやう乃こも近年むさう 小見 放 摩

の玉よ志まうーかうアハかの志うとりふ 屬 社 郡 後 庫 元

らうむむさうとやうさう志やうらん 尚 社 元

らいせうーきりーうどとまいけん 末 十 祠 冥 駿

いら志やう志んぢんの志よぞらん 指 番 位 法 取 悔

せうせうといふ事なうさうれん 是 志

人のうやまよあうーいをすんぬのいひら 殺 威 増

日く月これ系詣くさうといと 續











先客山楸仁王門額之寫

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

誘これれが  
お川例志小松  
松入相の了  
つぎぬ

孝心記

大

尾

かき

かき

かき

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



河内郡 河内郡 河内郡

多白 河内郡 河内郡

各早相卒歳を積ら其洲教流及學子するとの  
心不足りと世出其中小陰洲山并遠洲組立  
重れとる理を前法不合て務員之理弟通  
なると成悟又河内教流の中小柳生一戸田  
坊内右口流と奥体小予工史を助洲の号境  
新の急流と一流を葉立の放後教流を合試不  
今月今日、此近一夜と甚劣とら山維徳  
未修更を知り山唯上員事ハ安定せりと  
あふ也及不流内之廣小人オ古をりたし  
相東部と民流那集之地有れハ今偶居哉



求く茲に任妙術之人来く我劣とら  
はてき序て人をして師とてく教て愚術  
と忽破人更本教也為三子と治く為  
手人時多多子工夫之流依天道不叶  
佛神に擁護を乞ふ人これ家の中不  
秀者に奥依を傳末世不流依を傳らる  
と邪也との也

安永二癸巳年三月 大禾源由入道士流初傳  
又曰た乃不志邪河れ大或分負少く之習学を  
約き事車河く之能一様の助力ありすと  
敢て之厭唯け通不志哉厚同来く人可哉

所書南芽場下裏通り千川左邊  
桃井春彦と云乃

乃水飲乃水入来發大考に併一流と云極に仁  
と初んと云乃入于上試合由好村流依を源  
匿名と飾信を乃水入来仁投多是全  
考と云り云時用心然も試合由好に付子  
由立合中起り乃入通水飲乃未熟に夜中  
散多考上日限由約束らわ治乃多起正由  
入来以多響古日と云い也一は基礎惑に  
向後由乃以りて急度一流と云極に



出入東より河根に流るるを今日近山島に仁教  
多し内明鏡流下可也流るる仁三人の  
山名あり略之成程由流るる山年  
時村に仁仁入の越之り及感ん

巳六月

士流新

<sup>字三屋額</sup>士流新付山と中仁河根に流るるを  
負さるる事とせ及安定の中依之  
立合おるる処自息其流るる及  
初合七本打た方と一也當り  
付山の立合おるる事とせ及感ん

在後学くもおるる身流號取ら  
と標り名案あり外に  
又病等と稱して眼お我子  
なりら務負あり及山に  
成程立合して負あり  
山未も候あり人  
基お遠に  
右残念に  
け方とて柳あり及山に立合  
赤切黒嶽谷

赤切黒嶽谷  
字野三屋



河田初庵撰額

大木何某同傳言

予あるに、予、幼少、志、深、初、字、十、歳、に、て、  
澹、々、室、在、院、流、細、澗、と、新、當、流、と、依、り、す、り、り、今、  
壯、の、に、至、近、二、十、有、余、の、漸、二、流、と、寔、且、意、志、  
不、支、不、身、命、を、抛、抛、未、流、依、り、て、在、さ、し、可、り、と、  
尚、未、熟、と、獨、り、悔、み、然、不、大、木、何、某、捧、當、山、処、  
に、額、面、と、又、京、河、澗、流、教、流、に、至、奥、首、一、度、  
と、者、と、少、九、条、自、擧、り、予、七、六、乃、信、仰、し、り、

大木何某同傳言

身、波、先、生、慕、斜、面、に、上、一、刀、を、試、波、予、り、  
及、ち、支、阿、り、ハ、源、從、一、流、に、玉、妙、首、支、茂、形、の、  
の、砌、り、菊、五、月、中、旬、に、此、波、り、居、宅、と、乃、道、場、に、  
至、り、日、を、と、さ、り、不、他、流、に、仕、合、有、り、凡、人、教、を、  
七、人、お、席、有、り、予、も、進、志、に、横、子、尺、屈、度、奉、  
り、復、不、さ、り、於、入、口、及、尺、拍、処、俾、甚、甚、然、立、合、  
に、後、依、傍、負、伴、山、立、合、有、り、約、諾、故、不、一、入、  
頼、母、安、ん、だ、尺、々、処、不、右、七、人、に、内、口、人、甚、甚、と、  
仕、合、有、り、甚、甚、支、考、人、に、打、傍、支、考、能、就、中、  
内、或、人、傍、り、進、志、に、尺、一、り、甚、甚、一、刀、を、  
揚、り、奉、り、叶、唯、二、三、合、に、予、打、外、せ、り、家、依、之、



約諾し通傳山子立合るる處傳山色如土の  
甚劣微不慮病をり立合及以見苦安事  
云云斗然其顔面を遺るる可なりハ何れ  
承引之く處當日し精負附并名病三付立合  
及以し衆一札と書お陀之を銘目し及黄書各  
余依何れし引取予も右七人し一山中他前  
何れし人と云ふと毒酒波見せり及以し衆  
通下所新格の方と云ふし其後傳すく處  
七人し一山中七長師に其々やらん人し由  
承之予毒酒波り越えを考ふお負更  
と受之せりし文云已り過る及者あり

と宋以以扣尋及以精負お受そ者そに若  
と云ふ和と云ふ和ハ和もなり精負たれは  
負もハ茲受定せりのさならハ一編たら出  
俄不波ハ世俗おつ山師の教と知ハ依之予  
も波と衆形の志と云ふ予そ御名利し事  
有く右云く越在所は度由府と云ふ  
序に及之ハ顔面未引却る海と云ふ一  
中ら不絶るり今度字即何某又と書是れ  
精負有く処ハ顔面とお受波り海と云ふ  
先述の精負有く和ハ一人し一山中ハ内又  
精負有く事り其処ハ分的たれらハ



又、今度付山立合及以事臆病し懦又々  
席とあ去波と切く捨さるる子残念也波り  
以偽言欺万人子あ大方世上く英雄し波り  
空言：たらされ波り居宅と召し更益々  
更友季細義小記早

安永二癸巳年八月

下谷車坂位

河田初彦為政奉

右：記処予の眼下に召る処在舉茲付山又子  
残念し予り道場（秋山乃度試一刀を  
まじり）此處更志也

後士流斬額

燕雀戲何海内廣辛甚

人口辨難御イニシメ嗚呼虚々

實々只在此額々魁迦

實々中而已

已八月

士流斬







猿覈其旨轉贖社頭觀卒章不成文  
以博覽之士許評

示時安永二癸巳冬念七

赤峯陳人

高田源虎宗稿

大木宇裡西士抄呈露守立有藝軒

愛宕山繪馬堂三機也別仁別事ナリ一緒トナ入置リ也

借本朝之秘旨兵術勇力強情人情之隆不負  
是又繼傳子孫之秘術也末世殘武士之家之  
鑑也古故曰矛能制剛弱能制強爾之  
然才之達人願師範相嗜之新叶拙志師匠  
茂世蚤去之今我右工夫之以檢疏捷向明陸  
光傳不未究如紙面同流茂有之依也其心  
愚屢不思依之諸流之糸數度木刀竹刀鑊  
長刀ホハ御一度不負圓陀流流當地是  
非達人之必有之也異國之不知濟國之釘



道皆葉也惟式他流の學式諸秘旨皆教方也  
 達人才兄也其終人隨之一術を習取す此皆古場  
 之規模也億病を多系會り校り前は少むり  
 拙志方少むり何時に成立合ひの事は務負す  
 脱捷を以務り不知者多々候も達人之脱捷は  
 不意に拙志流成る目より度り別ら荒守に仕  
 合杯ホマると若ら常々相馬に執りて脱捷を  
 由在急少むり海由道測友人の多々且又此若  
 後思はれ下由招ひてトリス

安永二年九月

吳岸鴻川に所  
 依り木に在り

京堀川本園寺什物惣物寫

りき法師の者秘免由被  
 作すれ其くうは石返也  
 仍概違り候

土り十日

教家判  
 久家判



ワキ法源以効氣に  
有沙免許、由而按作  
下也、予の七散免、由之  
仍執違の件

文永十一年二月十日  
以兼判  
以平判

孫入及友

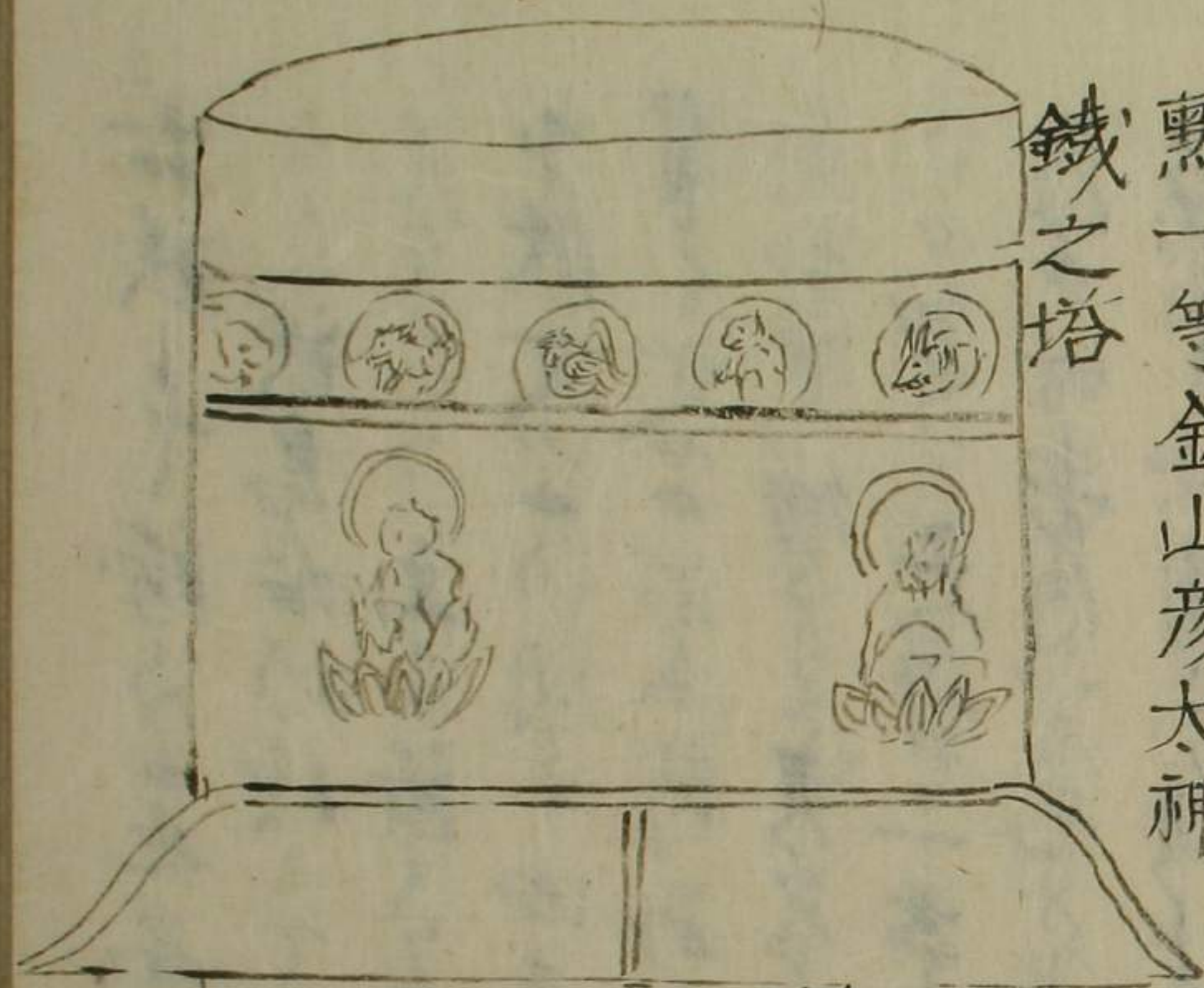
日下(抄)知

胡師古勢以免状

右人筑後房より  
沙免之仍執違の件

文永十一年後八月廿八日  
以兼判  
以平判  
光徳判





美濃國不破郡岳井宿南宮山美濃國一之宮正一位  
勲一等金山彦大神  
鐵之塔



正位  
法名尊空

本社南橫之山中段有

藤原大行  
藤原位本頭  
淡原太  
沙弥淨阿  
勸進主沙弥妙金  
大正河内國高路家  
應永五年戊辰月十日白

不為職之りふ好是此  
日今之り好志之者人結心松  
紫谷本國寺後地之候  
此比好之者不與之  
中御ノ宮中御年松高七部  
の中心之り好之  
五月七日  
杉屋判  
日進水房



右決とて清くも也高き文斗抄紙に又尺  
もく決鳥居の紙とて上下も有るは損失  
見えたり上は清くも八十二支とて下は  
中文字の用。四天王各一紙高く清く  
腐く文字不分明あり考古は中の紙い  
くかや増も見えんは損失して残  
るるなり天切二年寅四月無井。宿中  
たる時書角を乞く見くも石花墨とて  
招も決腐りたり

考 頼忠

明智系圖 左近將監 從五位下 伯耆守 頼貞子 若  
土岐系圖 美濃守 田 刑部少輔 鷹 一流傳

伊豫守頼清ノ子トアリ

美濃の山山とも美濃の中山とも云

新古今巻五 頼忠の山山一松りは伊豫守の山山

建保一松りは伊豫守の山山

續珍逸旅 郡とては伊豫守の山山

加賀美遠清寫



肥後の國越中よはる書生中字乃進昌禮公幹乃  
 訪り國藩大矢野五郎左衛門所藏蒙古軍の画卷  
 物ありそれ事書コトもつり各十三卷並りそれ  
 虫喰爛文多しゆよ一画卷物を秘して他備  
 され事書ハかして寫り繪侍りよ一こハ大矢野  
 五郎左衛門の先祖肥前國天草郡大矢野住人竹  
 崎五郎左衛門景親といふ者この蒙古の戦ひり  
 博多にて防戦軍功ありしゆ永仁元年癸巳二月  
 七日も記てありそれ軍の始末もそれ繪りて  
 其事法記一画と書き十三卷にわたりて家



寶坐一當時子孫大矢野立彦備門司持のよ一世  
由緒ゆゑ天草大矢野と申然本と呼ぶ一細川  
敏中守りて一経進し中世の事かきを昌禮も  
寫せよぬや語り也

考

○菊池傳記云弘安四年蒙古襲來肥前國天草郡大  
矢野城主大矢野十郎種休同三郎種村防之云云

後宇多院御宇弘安四年辛巳七月ヨリ  
伏見院永仁元年二月迄十三年十一月ハ弘安四  
年ノ蒙古軍之事ヲ永仁元年ニ画タル卷物ナ  
ラシ歟

○蒙古退治之旗之事

人皇九十年代後宇多院御宇蒙古使杜世忠來朝ス  
有故弘安四年辛巳正月杜世忠令殺害因是大元  
國蒙古ノ賊船四千有餘艘阿刺罕范文虎斬都洪  
茶丘張百戸干閻莫青吳萬五以下貳拾四万餘人  
同年五月二十一日九州ニ襲來七月對馬國ニ攻  
來守護代宗對馬守助國防戰終ニ討死了同十四  
日壹岐國ニ襲來ル守護代平左衛門尉景隆防之  
爲加勢大友出羽守直安次郎重秀難波次郎在助  
菊池次郎康成以下防之蒙古ト戰フ七月於相州  
鎌倉將軍惟康親王有蒙古征伐之評議宇都宮參



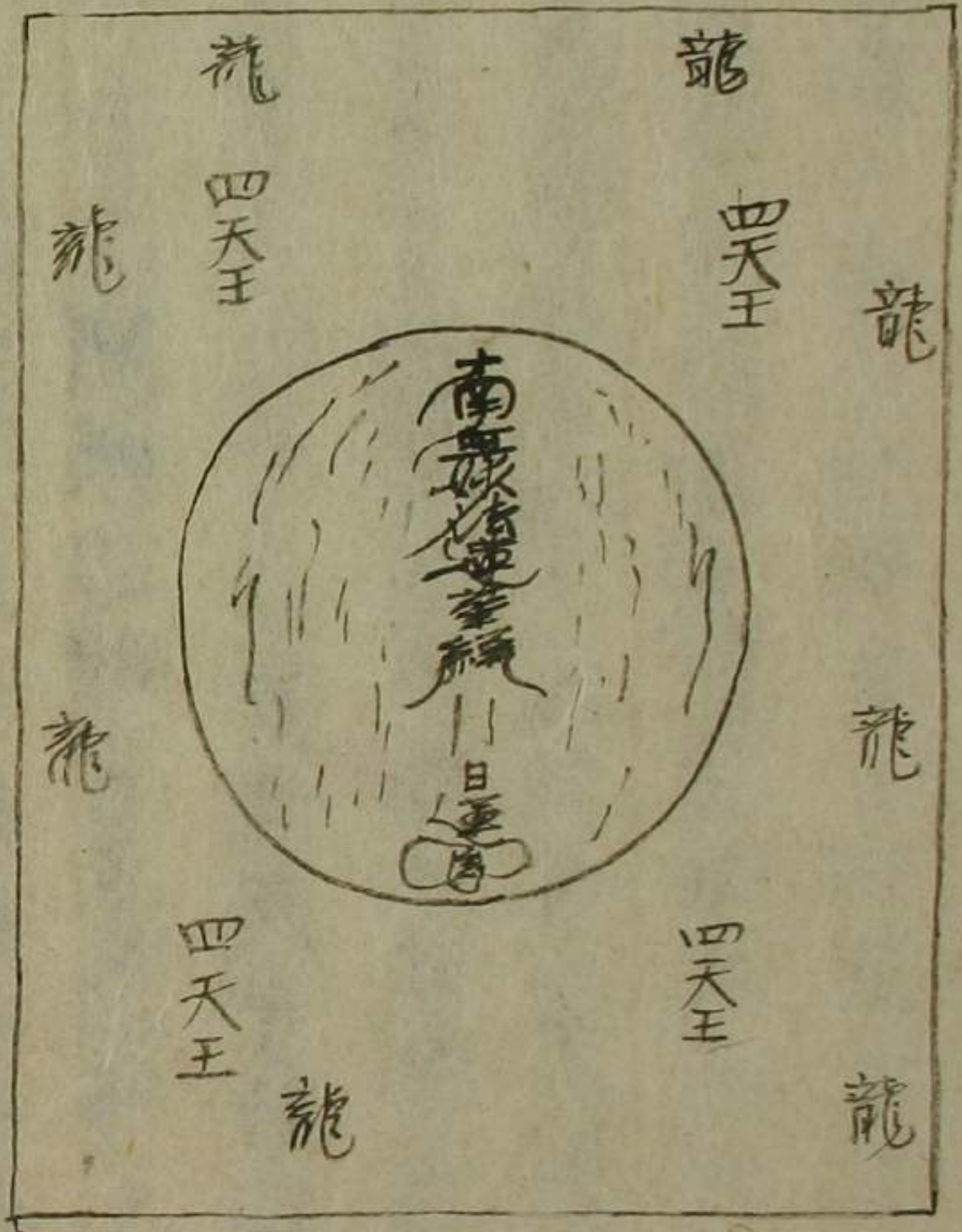
河守貞綱ニ被命蒙古征伐之大將西海ニ發向す  
時日蓮ニ命シ祈禱有リ四天王八大龍王日月ノ  
旗之圓中ニ令書大漫荼羅被與貞綱貞綱西海ニ  
發向濱邊ノ山上ニ此旗ヲ立ル八月朔日大風起  
浪荒蒙古ノ賊船悉ク破レ海中ニ溺死者不知貞  
綱古敗北ス張百戸ト云者破タル船ヲ造ントセ  
シ所へ貞綱下知シテ日本勢勝ニ衆攻ル拒戦シ  
蒙古ノ大將阿剌罕范文虎忻都洪茶丘ヲ始夷賊  
悉ク斬殺サレ閻莫青吳萬五ハ生擒レ蒙古悉ク  
征伐之云云彼日蓮ノ書シ旗ハ宇都宮貞綱之家

珍云云

此蒙古退治旗漫荼羅ハ當時武藏國葛飾郡北  
本所押上村日蓮宗天松山最教寺ノ什物トシ  
テあり開帳の時ヨ見ル古キものナク贋物ト  
ハ見えぬ<sup>○</sup>ト云フ<sup>○</sup>京本國寺開帳淺草幸龍寺ヨ  
テ見ルもの似せとの揃<sup>揃</sup>とは雲泥の違なりいふも  
も五百年も経つるに見へ手もつけらむやふし  
んほむと云ふべし



蒙古退治旗 赤地白紋 此内日蓮筆 長六尺五寸 幅五尺五寸



宇都宮貞綱筆  
旗記  
貞綱、宇都宮  
彌三郎、賴綱曾  
孫下野守景綱、  
男引付衆  
法名蓮昇

和泉三郎忠衡所置奥州松嶋燈籠銘

和泉三郎  
忠衡  
所置  
奥州  
松嶋  
燈籠

文治七年七月十日和泉三郎忠衡所置



越前國織田邑祠鐘銘

御子寺鐘

神護景雲四年

年九月十一日

味泉三府忠海所置奧伊計息壹十諸

伊都岐嶋旅山

水精寺

建立即聖人永意

奉施入

十九



治承元年辛丁二月二日

施主 右大将平宗盛

横洲丹生山田十年家棟札

上棟上石水之夏

大同元年七月戊午二月

十廿之未刻

平生字五

衡素三初版

目原





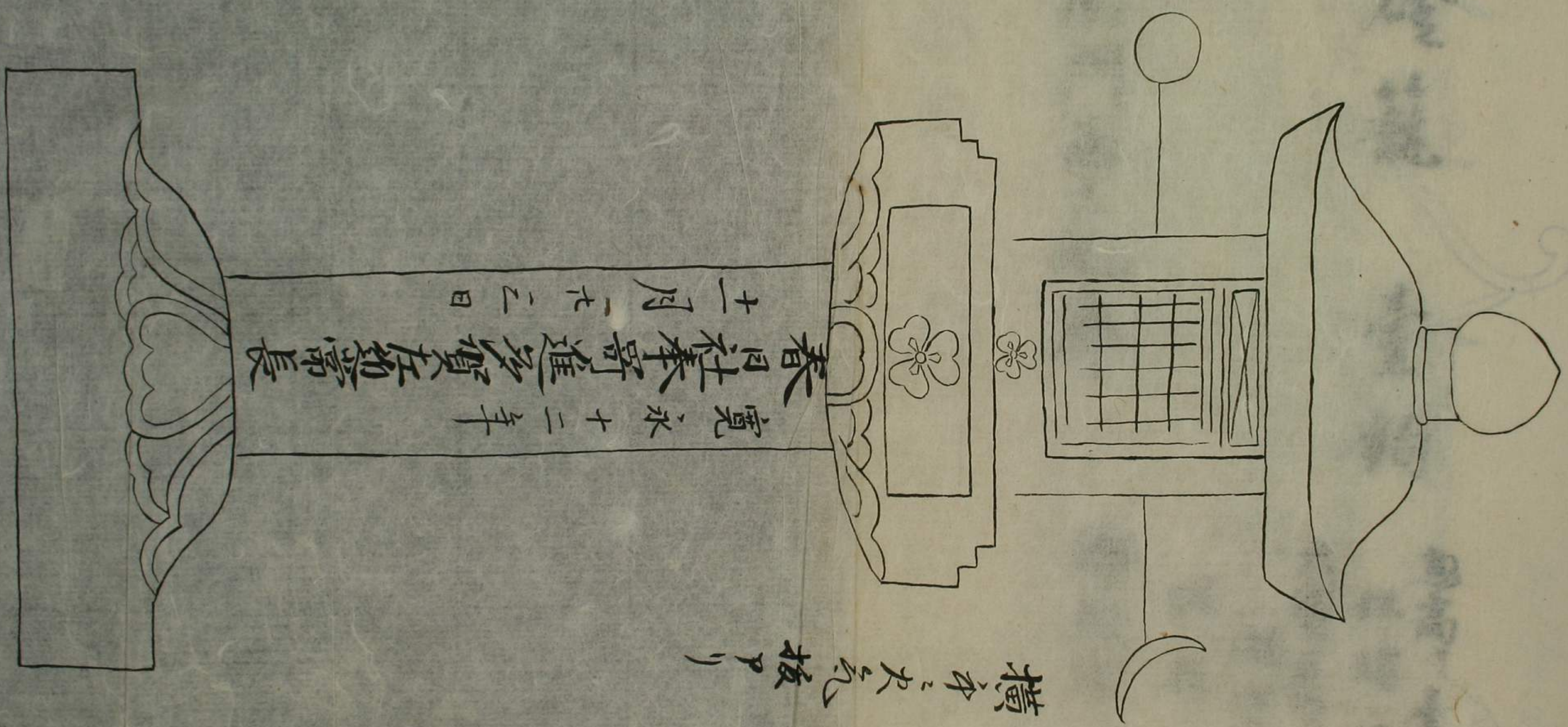


五世中州丁巳十月餘換巧  
 十家公言 5 換

右御燈籠籠在祈

兩宮御間

21



七尺五寸

笠幅部六寸

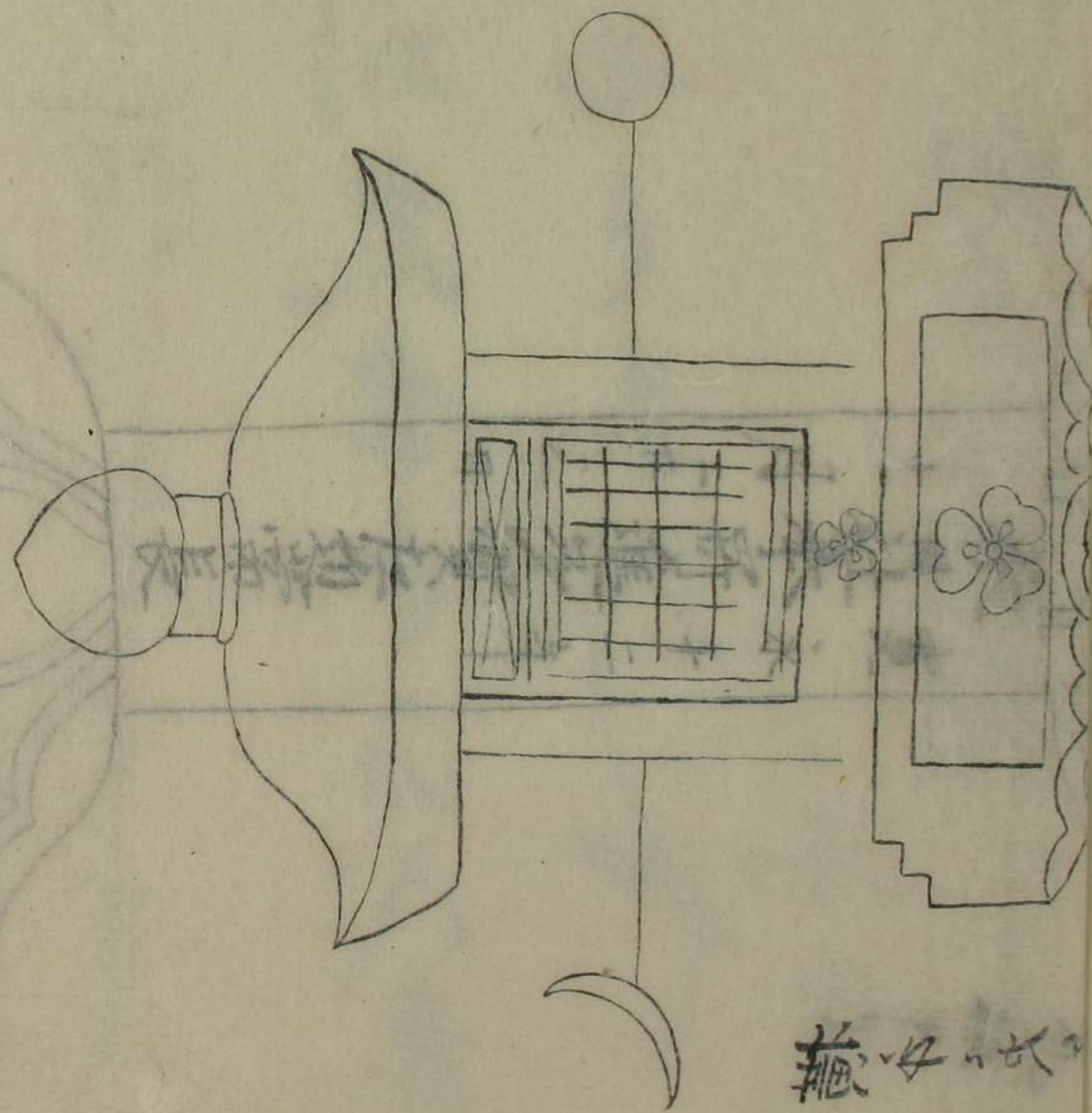
笠袋幅壹尺四寸

横弁之尺気板アリ

寛永十二年  
 春日社奉寄進多賀左物常長  
 十一月二日



14  
右尊 薪 瑞 梅 堂



蕪 女 女 女

九 八 出 也

細 高

御 金 燈 籠

臺 鉤

在所

南門西之廻廊

御 紋 廻 廊

想 高 臺 天 守

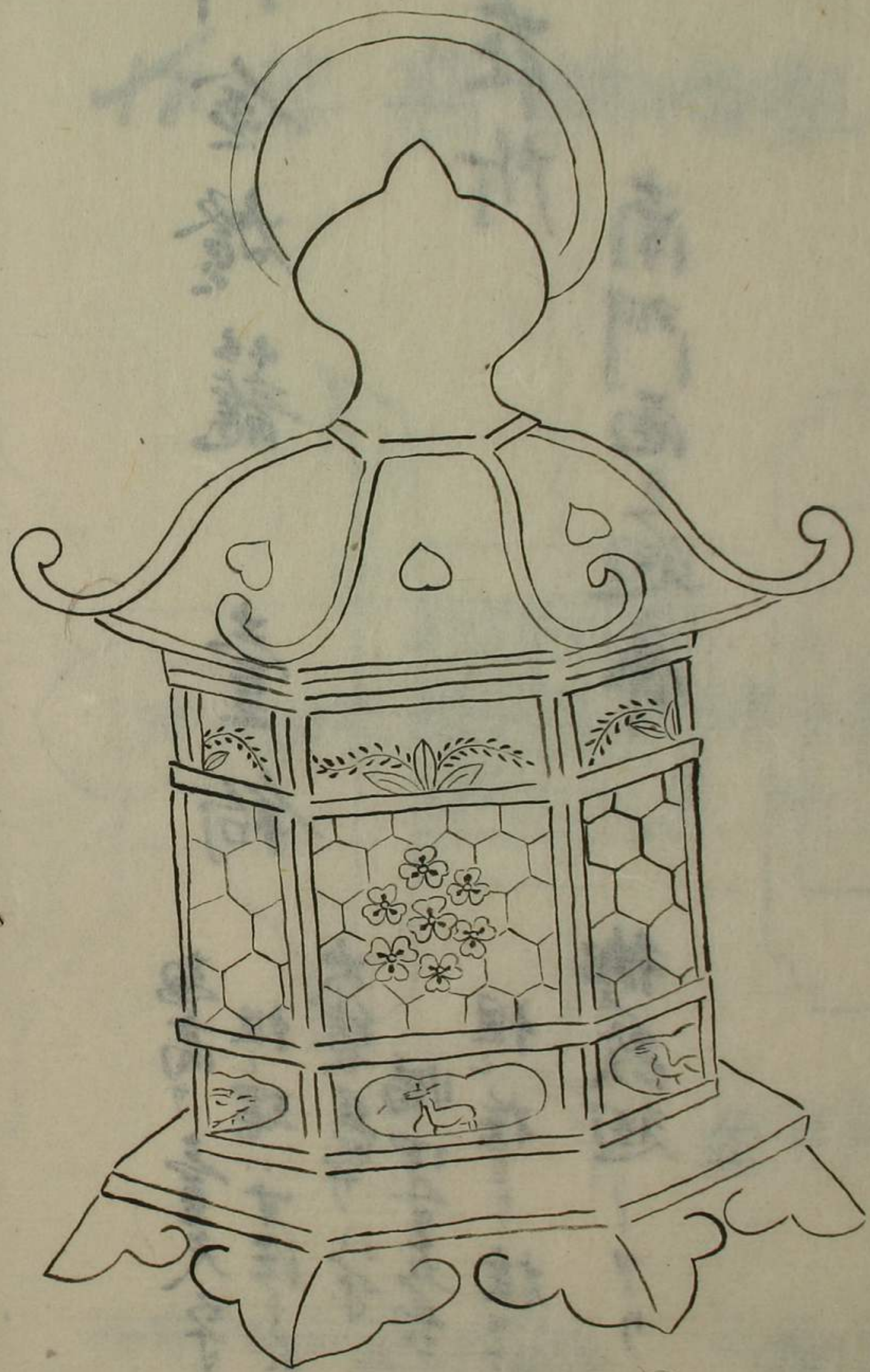
但 環 寸 法 外

大 袋 長 寸 守

幅 四 寸 五 分

但 柱 寸 法 寸 法





春日社

奉寄進

施主多世丸衛門常房敬白

年運長久息災延命

子孫繁昌所

享保九甲辰年十一月吉日

右御銘廻り柱

御寄進



右春日神前進敷之燈籠号菊而入本  
懇望之所今般入身以多賀高當所  
藏本写之可為後年之龜鑑者也  
可秘藏而已

于時寛政三年亥六月十日写之

多賀中原常政

土生寺鯉口銘

地藏院 奉鑄頭金鼓 壹口

正嘉元年己五月十九日鑄物師大工大和権守土師宗貞

私云正嘉元年ヨリ當辛亥年近五百三十五年

私云金鼓ハ鯉口車款 金鼓ハゴシグト云款

。頌和名抄云金鼓和名比良我根

。小右記云圓融院天元五年二月八日辛未早朝

。參九府申檢非違使宣旨夏左藤為長師頼向  
右大江匡衡



向東山打金鼓 寺數十一

。清少納言枕双紙云侍りて細やうなるかな  
とらてづんぐうちこせおろしき也。拾遺集春  
令鼓打ゆると細焼ゆるとしてよみゆるとる者系長能  
片六細やうなるこらなるる山さくくは上起てん  
やう

。江次第之圖局金鼓打

。堪囊抄云九云民屋門ニ立テ打金鼓ヲ聲聞師ト云是  
。聲聞師儀唱門ト書也凡聲聞ト云ハ教説アレハ一儀ニ

順セハ傍ハ是佛法修行ノ初門 青声説法ヲ生シ涅槃ヲ  
願故ニ聲門ト云也ト今此金鼓打ヲハ唱門師ト書  
家ノノ門ニ立テ妙幢ノ本誓ヲ唱ヘ阿弥陀經ヲ誦テ金鼓  
ヲ打故ニ余云是一條院ノ御宇寛印供奉ノ造リ給頌  
文也

私云此趣ニテハ金鼓ハ今俗ニ云叩鐘ノ事ナラシカ又金鼓打  
ハ六十六代一條院御宇始ヤウニアレハ六十四代圓融院  
御宇金鼓打ノ事アリ立門唱門師ハ一條ノ御宇寛  
印ニ始リ金鼓打ハ其以前ヨリ有ニナルヘシ



鰐口ト云名ハ古ク無シトイフニヨリテ古キ鰐口見夕  
ルヲ記又

江戸橋田島森稻荷鰐口 神主山田織部通徑所載

下川逸庄司行平建立

元暦元甲辰正月吉日

辛亥迄 六百八年

京都土生寺鰐口

銘前ニ出畧之正嘉元年丁巳五月廿九日同五百三十五年

山城國愛宕郡鞍馬山毘沙門堂九脇末社之鰐口銘

播州南木郡三木本郡出午礼天王宮大工家次

應永四年丁丑九月四日大願主藤原賢信

辛亥迄三百九十五年

武藏國比企郡慈光寺鰐口銘

武品都幾山慈光寺八所權現鰐口

明應七天戊午十月廿六日大工家吉敬白

同 二百九十四年

武州新座郡下新倉吹上觀音鰐口銘

武品新座郡下新倉鄉福田山東明禪寺存自代置之

元龜二年辛未六月朔日河村孫二郎殿寄進

裏ニ 吹上聖觀世音奉納 大工飯田孫七



辛亥逆 二百二十年

江戸永田馬場山王宮末社稻荷社鰐口

敬白奉納山王權現御寶前鰐口大檀那直景願主南仙坊

武勅豐嶋郡江戸館天正拾四年丙戌十月廿昔作者畚田和泉守空長瀬推名

同 二百六年

溪草觀音地内不動堂鰐口銘

武列豐嶋郡金龍山浅草寺三社權現鰐口一棧所

願主金森小四郎元和二年十月十八日大工谷長川助八郎吉久

辛亥逆 百七十六年

山城國北野天滿宮西脇朝日寺鰐口銘

山城國葛野郡北野真院觀音寺鰐口銘

右大臣豐臣朝臣秀頼公御再與之

片桐主膳正豐臣貞隆奉行焉

慶長十二曆丁未冬十二月吉日

辛亥逆 百八十五年

私云鰐口ト称ル七三百年来ノ一ナルハシ



真向三尊緣起

此卷之文  
 其本主觀五尊由具觀之  
 亦大自覺現相因亦觀之  
 比海國古觀像大世尊現勝在寺觀之



真向三尊之縁記

作惟<sup>まこと</sup>六覺王普遊を弘願を教網成張り  
 苦海の迷辨をすくむ慈悲乃寶車をたてし  
 樂邦れ是殿に置ひし<sup>まこと</sup>本地を山ありて此の  
 海原に之をよこす<sup>まこと</sup>利あり十<sup>まこと</sup>す及  
 高宗皇帝念后不思憐念  
 病をうけよせ給ひ<sup>まこと</sup>頻りにありしは  
 皇帝普く<sup>まこと</sup>証成下り貴僧を<sup>まこと</sup>召て行念  
 帝法あり<sup>まこと</sup>



多くは酒のやまを多く苦辱大師を請へて  
 奉れば子細をのぞく大師の本より法苑の巻迹  
 なる所を告ぐりてく昔天竺より月蓋を去れ  
 息女五持乃惡病をうけてて命れを去りて  
 交事一長者佛よりあまうりてを親也女来り  
 法苑の巻及つてく法苑の本は慈悲を以て  
 彼病速より平復も其感念より此の巻にせよせ終る  
 て文より今ま一向にても并親を去る法苑の巻に  
 其源を親を指して此の法苑の巻に揚柳の枝を指し  
 擲至善菩薩右に法苑の巻に蓮華れより一葉を以て  
 指したるは法苑の巻に字印を指して是れ也

師を妙相成大師自給りて法苑の巻に  
 法苑の巻にありて後より授りて時皇帝歡喜此偈は  
 かくて善華妙心をうけし法苑の巻にありて  
 法苑の巻にありて後より授りて法苑の巻にありて  
 帝位への月をせ給ひて 則天皇后より女帝  
 ありて法苑の巻にありて後より授りて法苑の巻にありて  
 て法苑の巻にありて後より授りて法苑の巻にありて  
 穩りて法苑の巻にありて後より授りて法苑の巻にありて  
 法苑の巻にありて後より授りて法苑の巻にありて  
 七代 後醍醐天皇此の巻にありて法苑の巻にありて  
 法苑の巻にありて後より授りて法苑の巻にありて



其後石清水八幡宮に納りて是利家其將軍  
義満公はく帰依あり是と請ふと云ふ教ゆり念  
ふしりける次に武田定家あり信長が文に信長に  
て信長に信列菩提光寺に納りて信長に  
て信長に其に後永正年中尚國の城主武田法興守  
信虎病を憂ふに不思憐の言著と感ふに  
信て信長に城門に移し茶飯燈籠あり架し  
か付に病愈ふ念ふに信長に寺を建て並せり  
安奉し信長ありて金願卒久し安小尚守  
乃岡山辨答仰之上人生烟の列信姓を言良志  
末葉小し同列大樹守并山智天を思慮上人信

中子智道通佛の當時崇通ははり高し  
あり時々の國より尚國湯の寺に入湯の信虎之  
城門より信長に法法徳國に信長に信長あり  
し仰之誠けしは信長に信長に信長に信長に  
し信長に信長に信長に信長に信長に信長に  
後極東の佛宇大永元年辛巳年信長に信長に  
古傳の法は一字の精舎に建之し信長に信長に  
ありて信長に信長に信長に信長に信長に信長に  
き六十時天文二癸巳年信長に信長に信長に  
天守新守と勅額とあり信長に信長に信長に  
久正守中の人信長に信長に信長に信長に信長に







一しゆとて近くして世の以てあはれ世中深く世を信  
任ありて若しこれ病とのそをまぬはしり  
持くす急の病候ひ是を去りしやうら母を信  
あつとてしりしやうら母を信あはれ  
れこしく世乃利益代海子人此後生を安樂  
なりん事教をあつとての源を信あはれ  
しりし女人利益の世を信又男子は形は  
信んぬる者よるしく現世のうら母を信あはれ  
あつとてしりしやうら母を信あはれ  
山を信とてしりし妙法の世を信あはれ  
すの源を信あはれ

世の中より病を除くは世の中より病を  
て身心あはれ現世を信あはれ  
陀佛の利益の世を信あはれ  
不思議の世を信あはれ  
長く地は人あはれ世の中より病を  
安樂とてしりしやうら母を信あはれ



慶長十六亥年十月十九日

甲斐國山梨郡府中

泮草印德山天尊禮守六世祖堂記

右一卷依懇至令書字記

左中將源有統之

正德三巳歲臘月日

千種

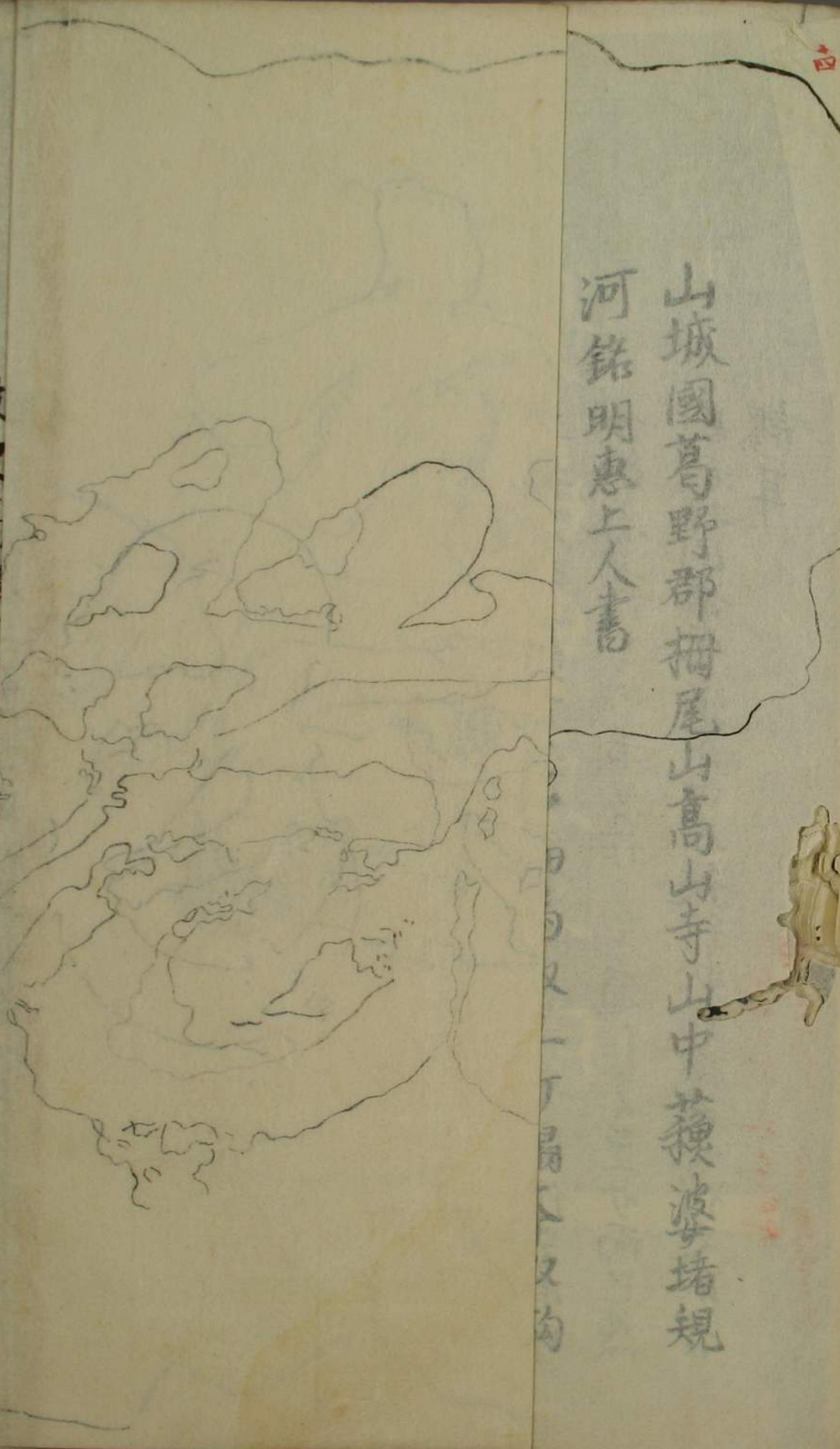
左中將源有統之

正德

後任權大納言改有敬卿  
三年戊午三月卅日薨五十二歲

山城國葛野郡柵尾山高山寺山中獲婆堵規  
河銘明惠上人書

殿東高欄上掛墨守三邊不三才、  
嶋捨雨石也





正復三日歲臘月日

後任極大綱言改有敬卿  
二年庚午三月卅日薨年十二歲

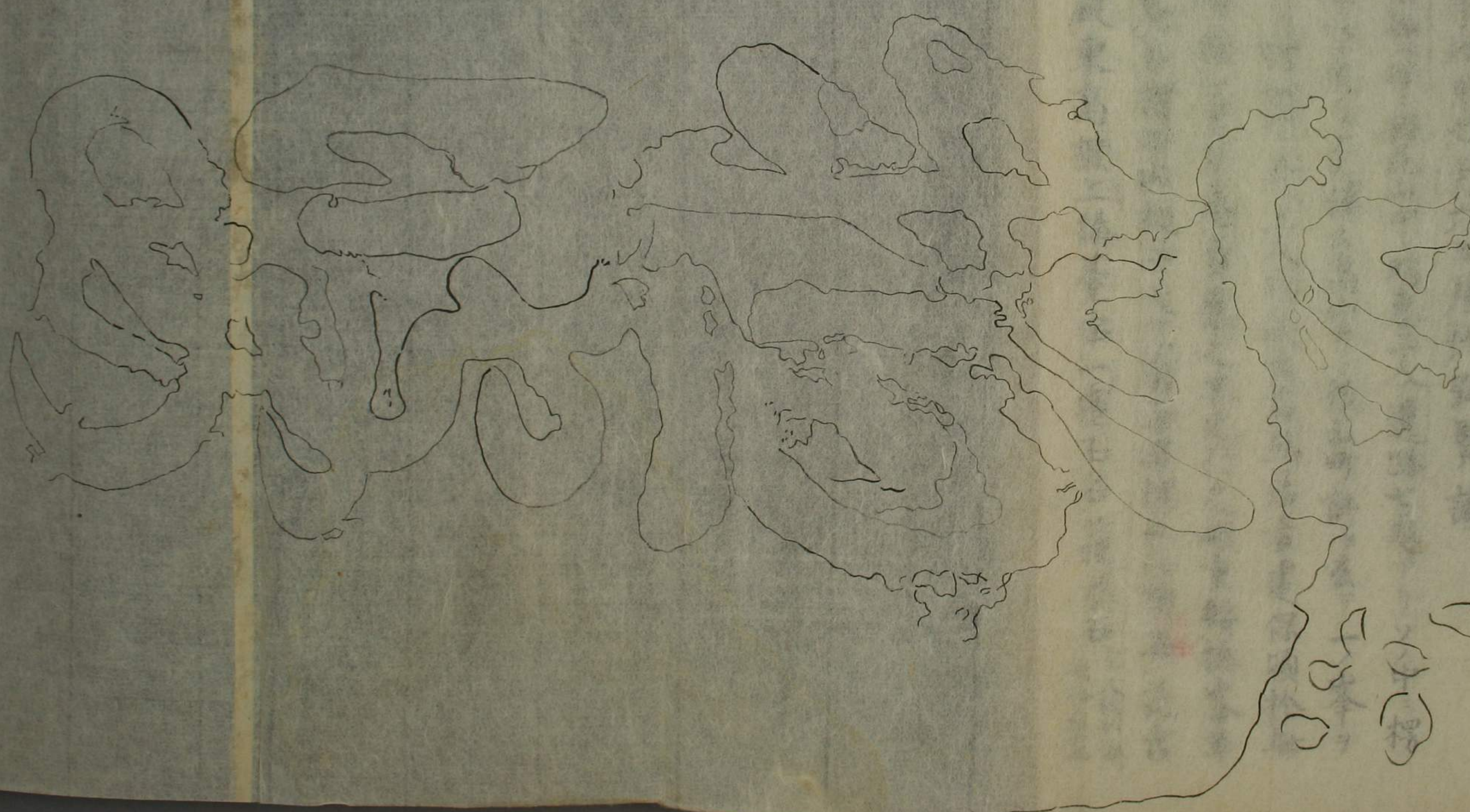
左中將源有統之

山城國葛野郡栴尾山高山寺山中獲遺塔規  
河銘明惠上人書

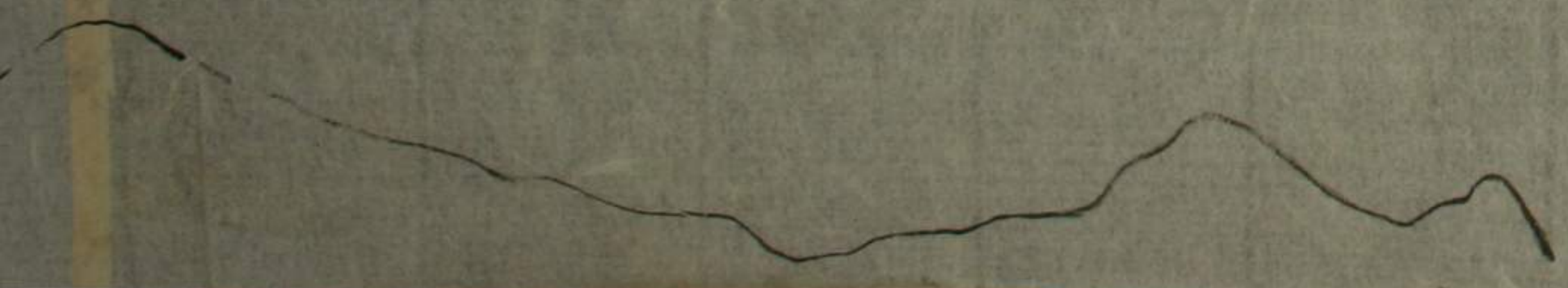
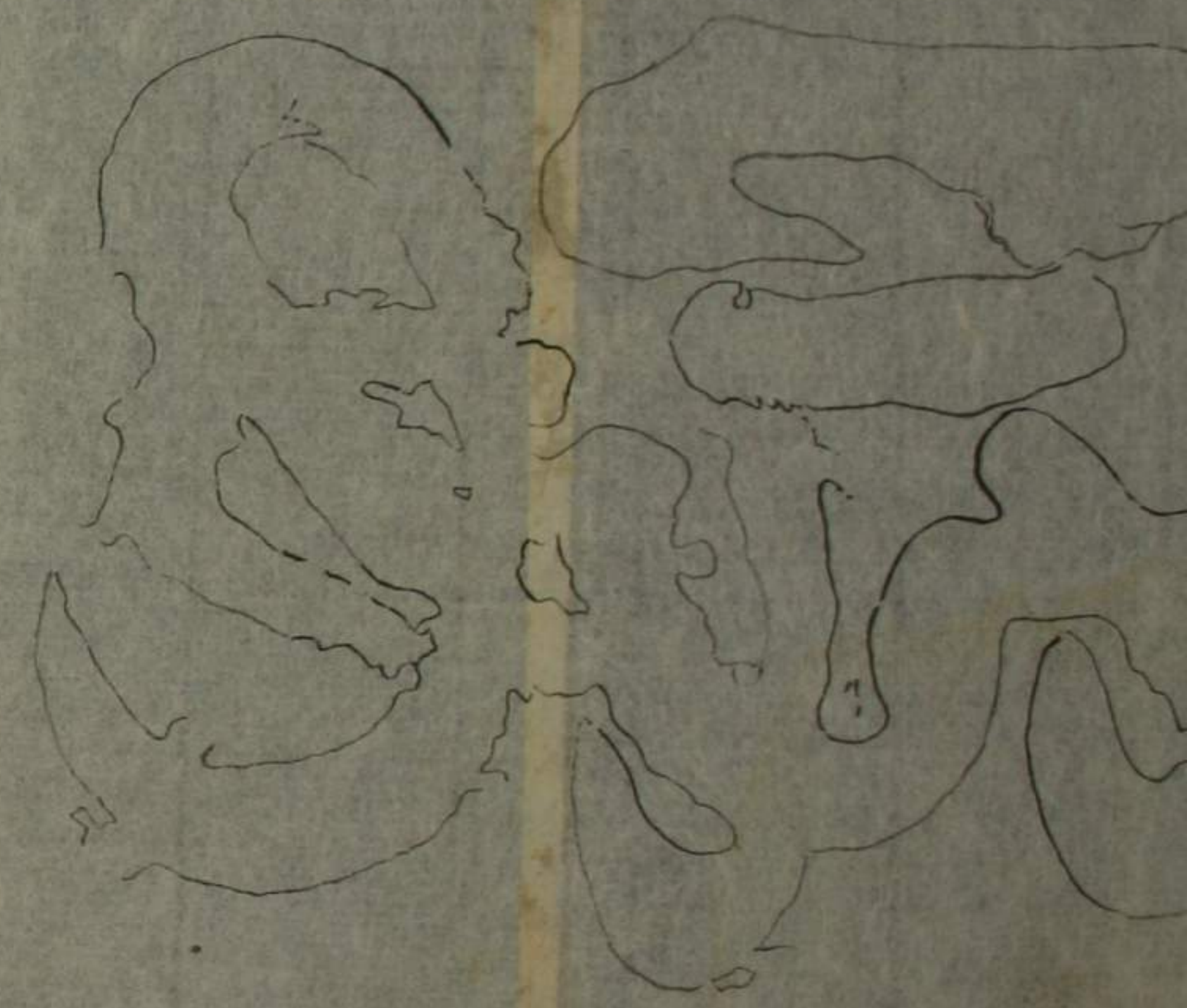
在元大綱六年丙午夏中細為叙主打搨本双鈎

後任極大綱言改有敬卿

二年庚午三月卅日薨年十二歲













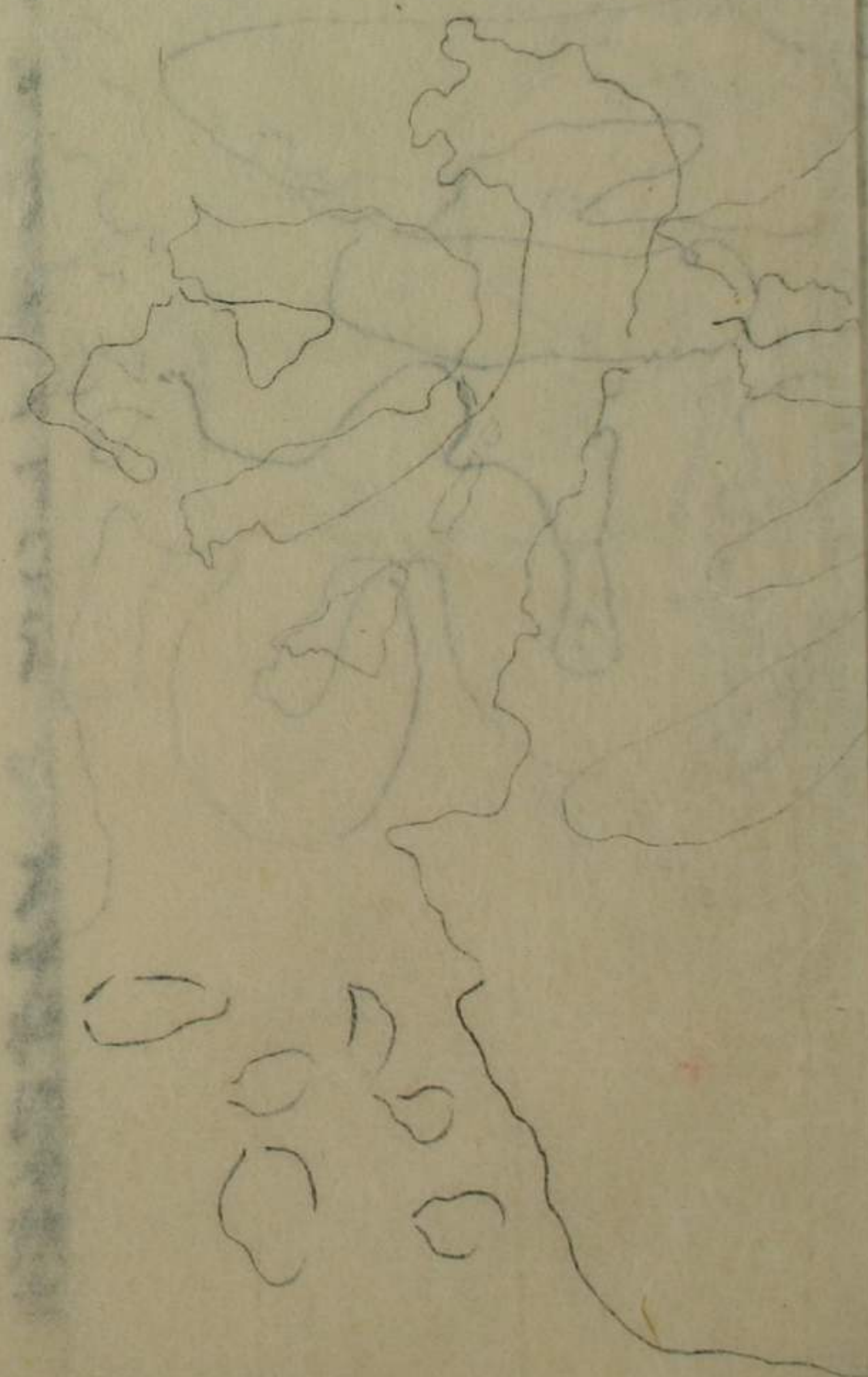
山城國葛野郡柵尾山高山寺山中蘓波婆堵規  
河銘明惠上人書

右以天明六年丙午夏中畑為叙主打搦本双鈎  
同八年戊申七月六日屋代弘賢識

弘賢按柵尾山中明惠上人遺跡七處アリソノ中  
柵尾ト云アリ上人傳云高山寺ノ後ニ所許ラ云テ一ノ峯ヲ  
トテ柵尾ト名ク上人行狀云右幽居者建保頃於此  
峰結一字草庵貞應之末元仁之始重結構峯草  
庵名柵尾山擬干天竺南海濱柵尾山頂名<sup>上庵</sup>花宮  
殿東高欄上構臺安一靈石名<sup>上</sup>蘓波婆石  
上人紀列海  
嶋拾取石也

正徳三己歲臘月日

十種  
左傳將海有流之儀  
後修補大綱言政有政卿  
天保三年三月廿日 鹿野寺藏





抑若石号<sub>三</sub>蘓婆石者於天竺烏伏那國蘓婆卒  
 堵河之流多留<sub>三</sub>如未千幅輪足跡洗彼遺跡之水  
 必入巨海百川<sub>三</sub>飯海一味無差別縱雖為<sub>三</sub>邊列之  
 孤石豈不<sub>三</sub>滌<sub>三</sub>蘓婆卒堵河之水乎仍其石号  
 蘓婆石<sub>云云</sub>寺僧<sub>八</sub>傳<sub>ヲ</sub>蘓婆堵規河<sub>云</sub>是碑  
 面第三字似卒字<sub>之カレ</sub>行狀取識<sub>卜</sub>寺僧取言  
 卜碑面<sub>卜</sub>咸不同<sub>三</sub>升<sub>三</sub>賀<sub>三</sub>處  
 再按規覩也雖古人草書矢者在左亭同作<sub>左</sub>不可  
 分然矢多作<sub>左</sub>匕者<sub>多</sub>作<sub>左</sub>去<sub>通</sub>作<sub>左</sub>至<sub>妙</sub>而已然  
 則覩堵同韻常通用可以從行狀所識而寺僧之取言  
 謬耳

形浦山碑

河州春日村

飛鳥淨原大朝


魏  
 齊  
 周  
 隋  
 唐  
 宋  
 元  
 明  
 清



堵河之流多留如未十幅輪足跡洗彼遺跡之水  
必入巨海百川既海一味無差別縱雖為邊列之  
孤石豈不滌換婆卒堵河之水乎仍其石号  
換婆石云寺僧傳云換婆堵規河上云是碑  
面第三字似卒字之カレ行狀取識卜寺僧取言  
卜碑面卜咸不同云升記買結  
再按規觀也雖古人草書矢者在尤旁同作克不可  
分然矢多作先也者多作克之通作克至少而已然  
則觀堵同韻常通用可以從行狀所識而寺僧之取言  
謬耳

形浦山碑

河州春日村妙見寺物

飛鳥淨原大朝廷大弁  
官直大貳采女竹良卿所  
請造  形浦山地四千  
代他人莫上致木肥穢  
傍地也 己丑年十二月廿五日







世羅碑十三首五

采女臣竹良卿傳

竹此曰  
豆久

日本紀曰竹羅姓采女臣初叙小錦下

飛鳥淨御原朝廷辛巳年也十年秋七月辛未為新羅大使

赴于新羅國九月己亥至自新羅拜朝而叙直大肆後

年以大辨官直大貳卒葬于河內國形浦山後年已下  
據此碑文

天明八年戊申秋七月廿八日

中川忠英摸寫及傳叙

河內國志曰河內國石川郡妙見寺有  
石碑勒曰飛鳥淨御原朝廷已丑年  
十二月廿五日其餘磨滅不完之即  
此碑也 淨御原朝廷者 天武天皇也  
已丑年者持統天皇二年也至天明八年  
通算一千一百年

藤原忠英識







同寺制札之文

赤坂尾山、安樂寺

之、以て遊坊、務

兆、分、中、慈、族、於

之、之、之、之、也、也、也、也、

志也

本、由、中、務、也、

九月七日

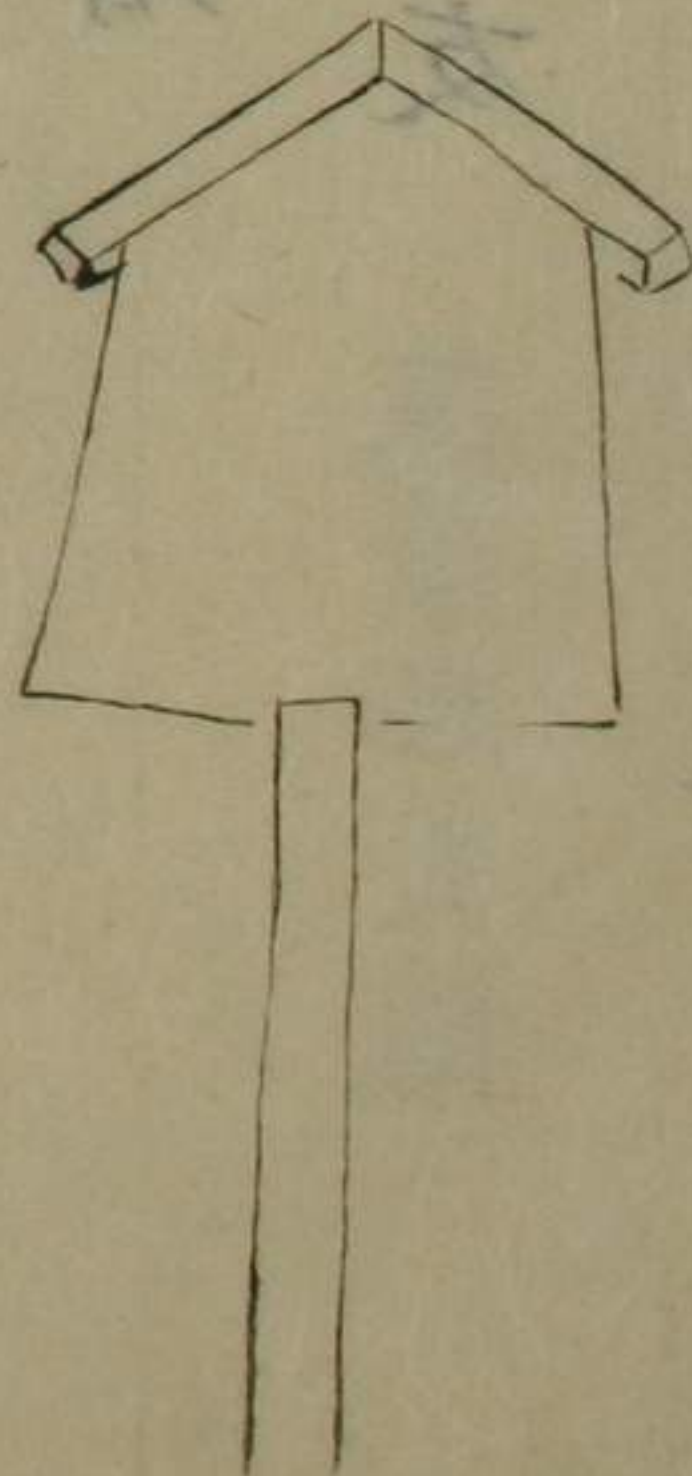
志務判

并、印、各、於、也、

志務判

天明八戌申年四月二日

山中長瓊寫



攝州須磨寺什物辨廣之筆跡寫

須磨寺

此寺母江南不為

一校於新遊



軍者任天永紅  
葉之例伐一枝  
者下第一指

吳江上支  
涉學筆

為春伴代  
明  
神能  
病者



大栗元平願傳  
正月二日氏義所

飛舟太馬友

遊河之舟

右攝州須磨寺什物辨慶真蹟之寫  
仍懇望乞需之以伊勢氏貞丈之藏本摸  
之者也

皆明和九壬辰年正月下幹

多賀氏常政



檉州八部郡長田郷

長田大明神 寶物

祭神 事代主命 津國四座之内

神鏡 三面

裏書ハ 共 比日々 鑄込 座儀

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '神鏡' and '三面']*







淳和王御寄附  
神鏡ノ裏

祭神、  
天國主神  
御子之  
事代主命

大國主神

大物主神

大己貴神

志固男神

八千弋神

天國主神

顯國王神

天下泰平五穀  
成就國家安納民  
福壽一切運刀勸願  
弘仁庚寅天九月十日

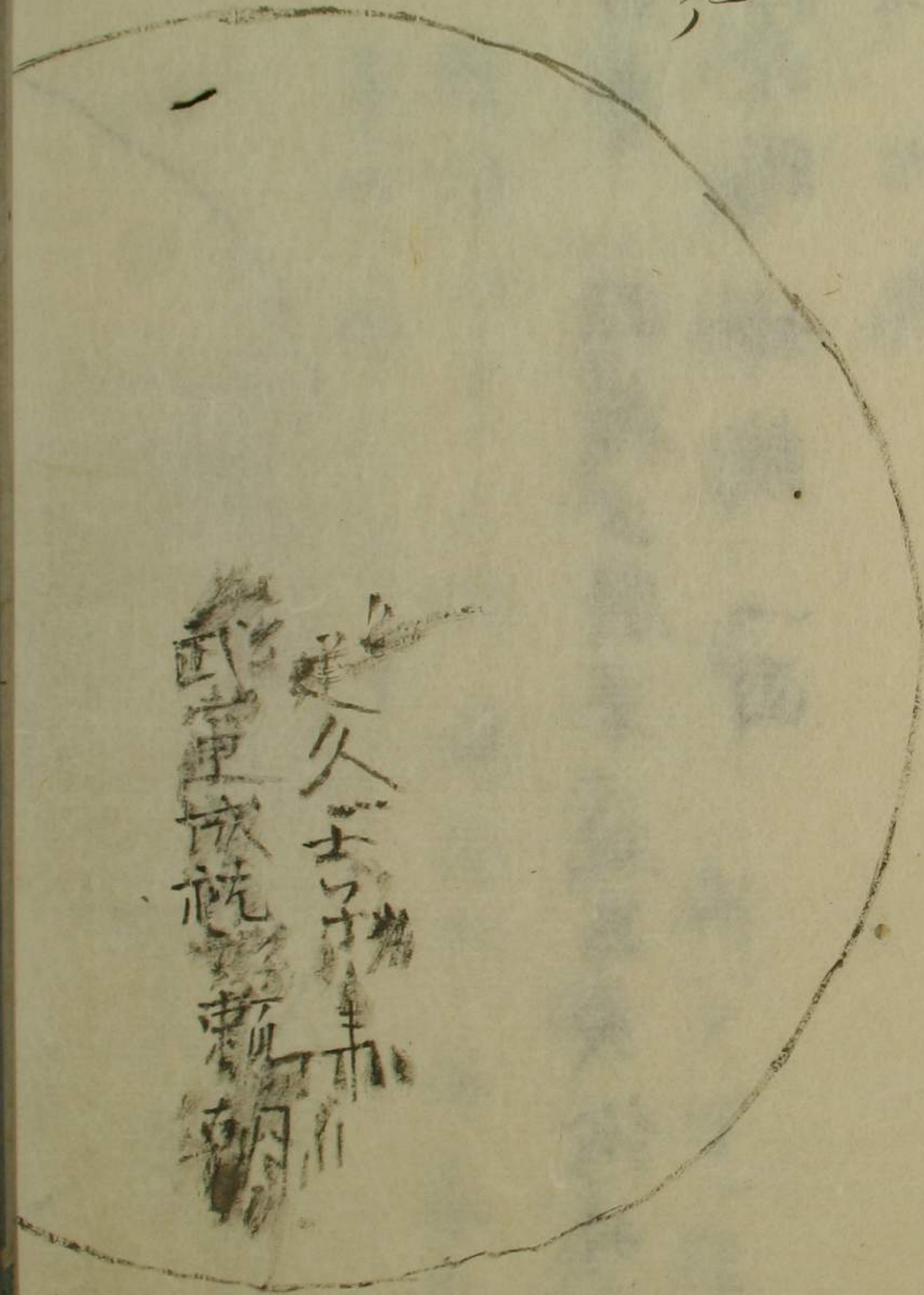
淳和王

御所神事空海七日護摩燒

社司從三位中將中臣春宗

長田社神主 天兒屋根命孫之則此春宗之先祖社考之而得之今大中臣春盛下号

神鏡ノ裏



建久壬子  
武庫成統



右者

賴朝公將軍被為成給時為

願成就

神鏡

一面

并

### 神輿

此神輿委々寫一朝夕寫之難々

高サ弘雀鳥一テ凡壹丈横六尺余リ

瓔珞四方ノ丘隅團扇如ク佛家花

蔓如ク形





右者 賴朝公將軍被為成給時為

願成就 神鏡 一面

并

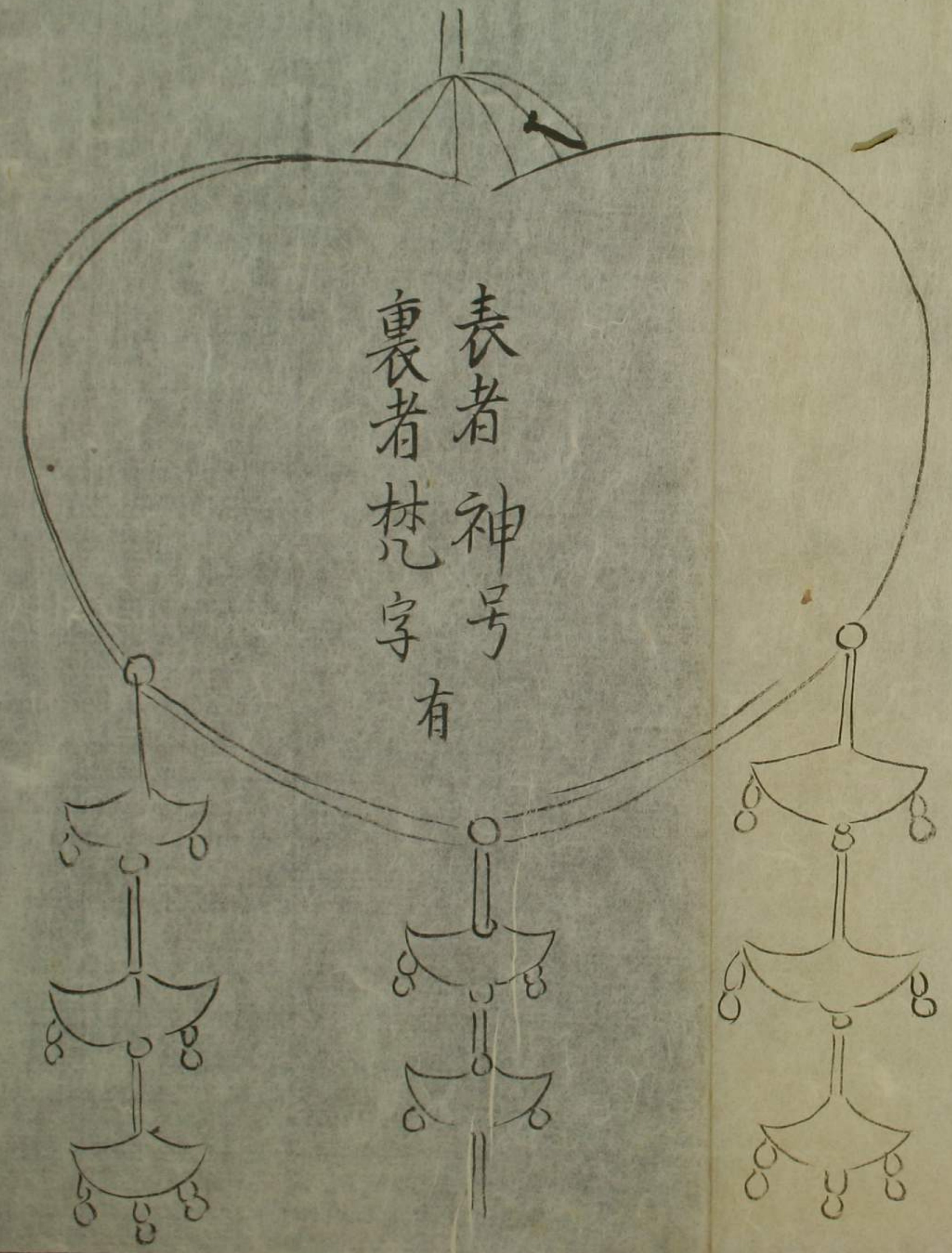
### 神輿

此神輿委々寫一一朝一夕寫之難ク

高十弘雀鳥一テ凡壹丈 横六尺余

瓔珞四方ノ丘隅團扇如ク佛家花

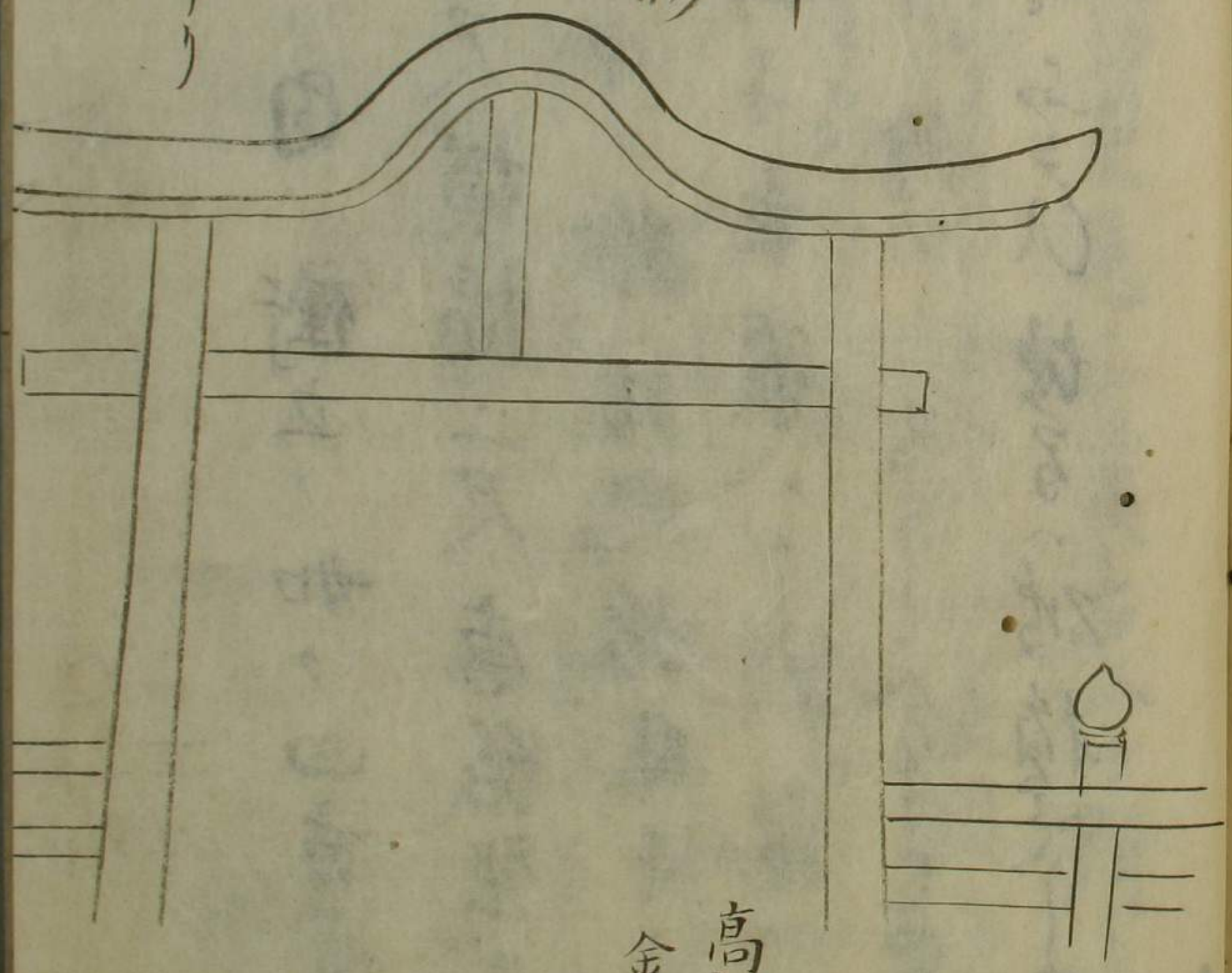
蔓如ク形



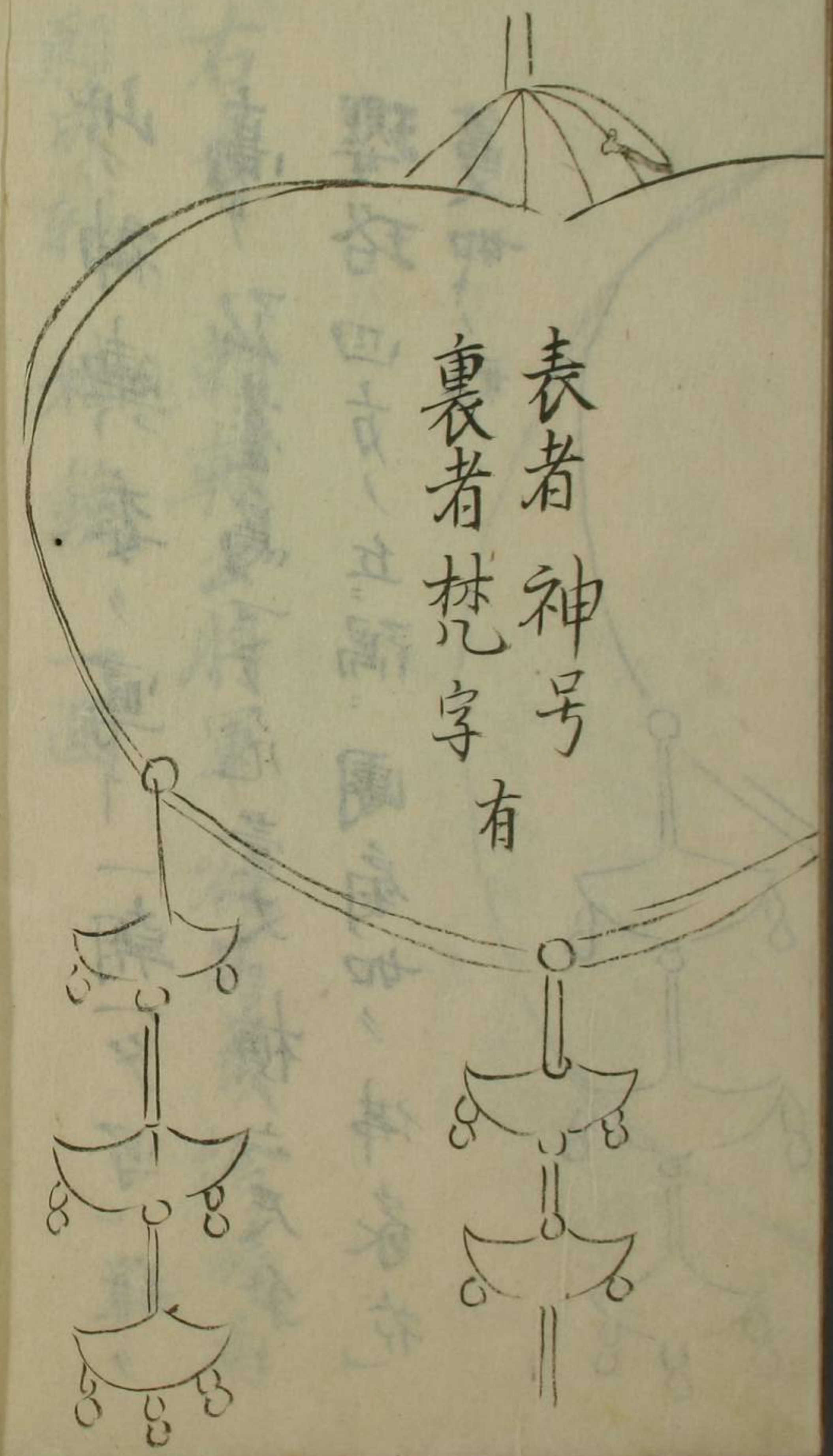
表者 神号  
裏者 梵字 有



神輿ノ  
 四方ニ鳥井  
 惣金丸キ形  
 笠木モ凡シ  
 中ニ金ノ額  
 神号四方  
トモニ  
アリ



高攬モ  
 金ニ  
出  
ル



表者神号  
 裏者梵字  
 有



此鳥井ノ内 衝立ノ如ク四方ニ有

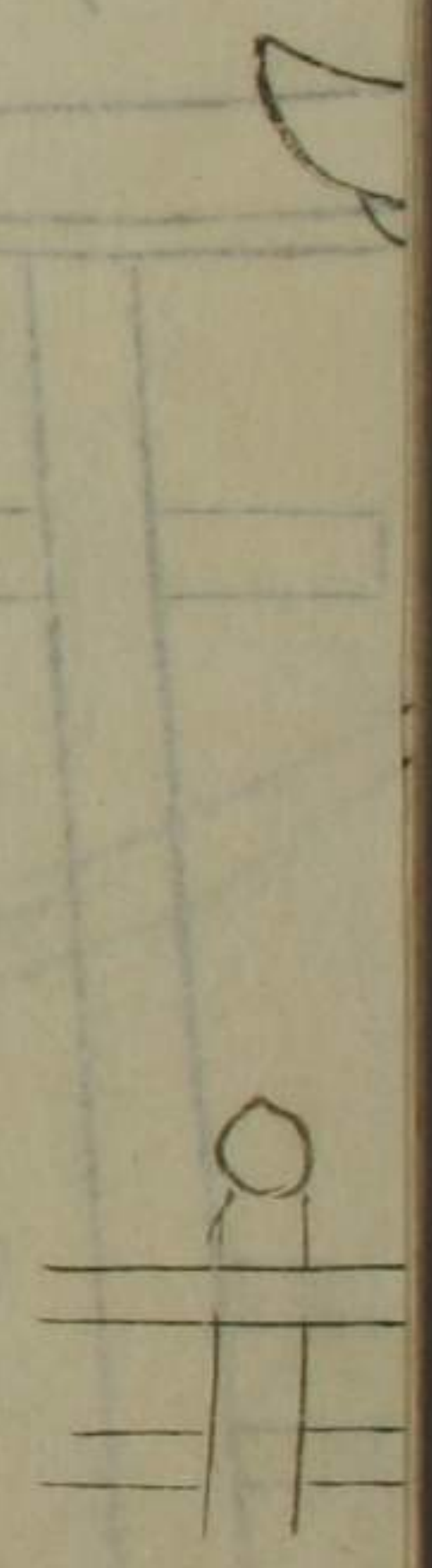
高サ壹尺 横幅二尺 唐紙張黒

陰ノフチ中 繪 須地 板 彫色トシ

牡丹 獅子表裏ハテ所 線ハ丸

らん中ノ繪の もう一人金トシ

染も一向ニふらハ地名ハ破損



此繪も繪の具色ニ変右ハテ所トモ次

中ニモ中ノ如クトモ上代ノ風

子トモ中ノ如クトモ中ノ如ク

ありと海ノ中ノ如クトモ中ノ如ク

花ハ神連トモ百石地領

度ニハ如ク乱ニ御朱印

の身ハ如ク乱ニ御朱印

花ハ神連トモ百石地領

度ニハ如ク乱ニ御朱印

の身ハ如ク乱ニ御朱印

花ハ神連トモ百石地領



高井村家

村上天皇御宇

年中どとり早魁の時尚社也

梅田の忍辱寺と甘と潤ひの奇物

とて御勅書の額十野道凡の巻

と御首と云傳へると岩井と壬午年曆

應和二年二月 御寄附と岩井御

石燈籠二ツ 御寄附社頭川ありと

満水の時夫とて今を奉残り有る

母家も馬場先付還あり右風雨

あつりしとき正故度と隠居あり

破損故文字もころるもの山を

以て折して中の神号は西中残り

手も前より社とくしうの酒あり

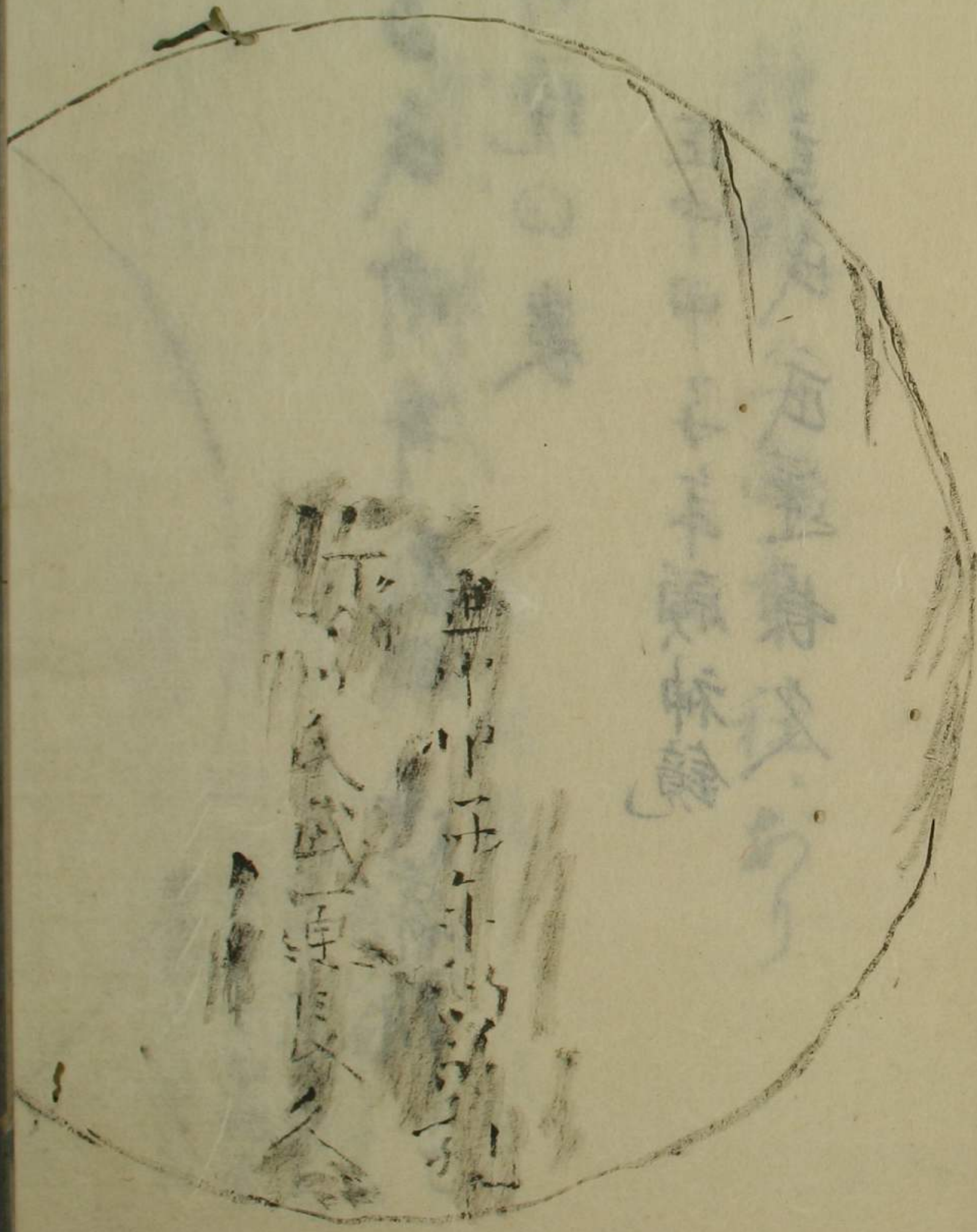
岩井今もあつて西乞の時を神樂を

申して濱辺の尾地村もこの傍に一夜



守護神居此惣ち。毎月の性音とる。長  
 長園大照神の每乞の昇人別火七日海中  
 物忌とて昇ゆるの昇神自も前七日条礼  
 二日物忌かゝく精進 齋と申す。

(Faint bleed-through text from the reverse side)





高氏御寄附の御寄附  
神鏡の裏

正中甲子年願神鏡

高氏武運長久

右神鏡 三面 本社あり

外 神代 七面

今あやまりて  
皇の面とやい  
正月十六日夜是  
をまると申地堂  
薬師をとりい



不城ノ貝

高野山 神鏡  
神鏡の裏

神功皇后三カヨリ  
海老ノ御出立度大御水  
とすくひあうりか子孫  
苗社ノ御寄附ノ御  
大ニ破損ノあり

正中甲子年願神鏡

本所藏ノ神鏡ノ裏



